

71
449

022669-000-6

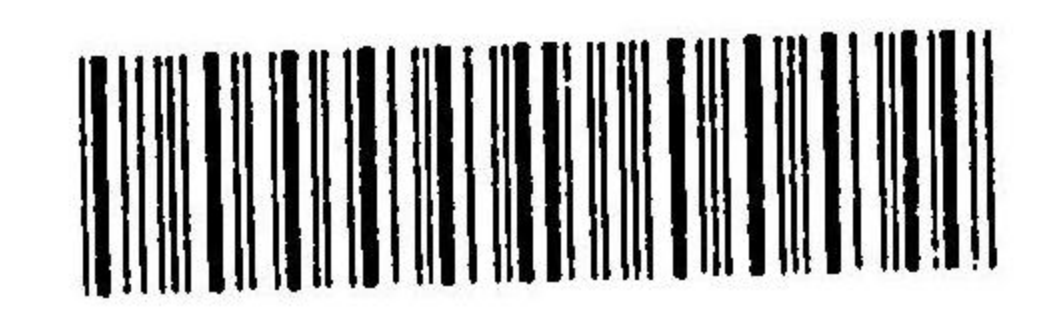
71-449

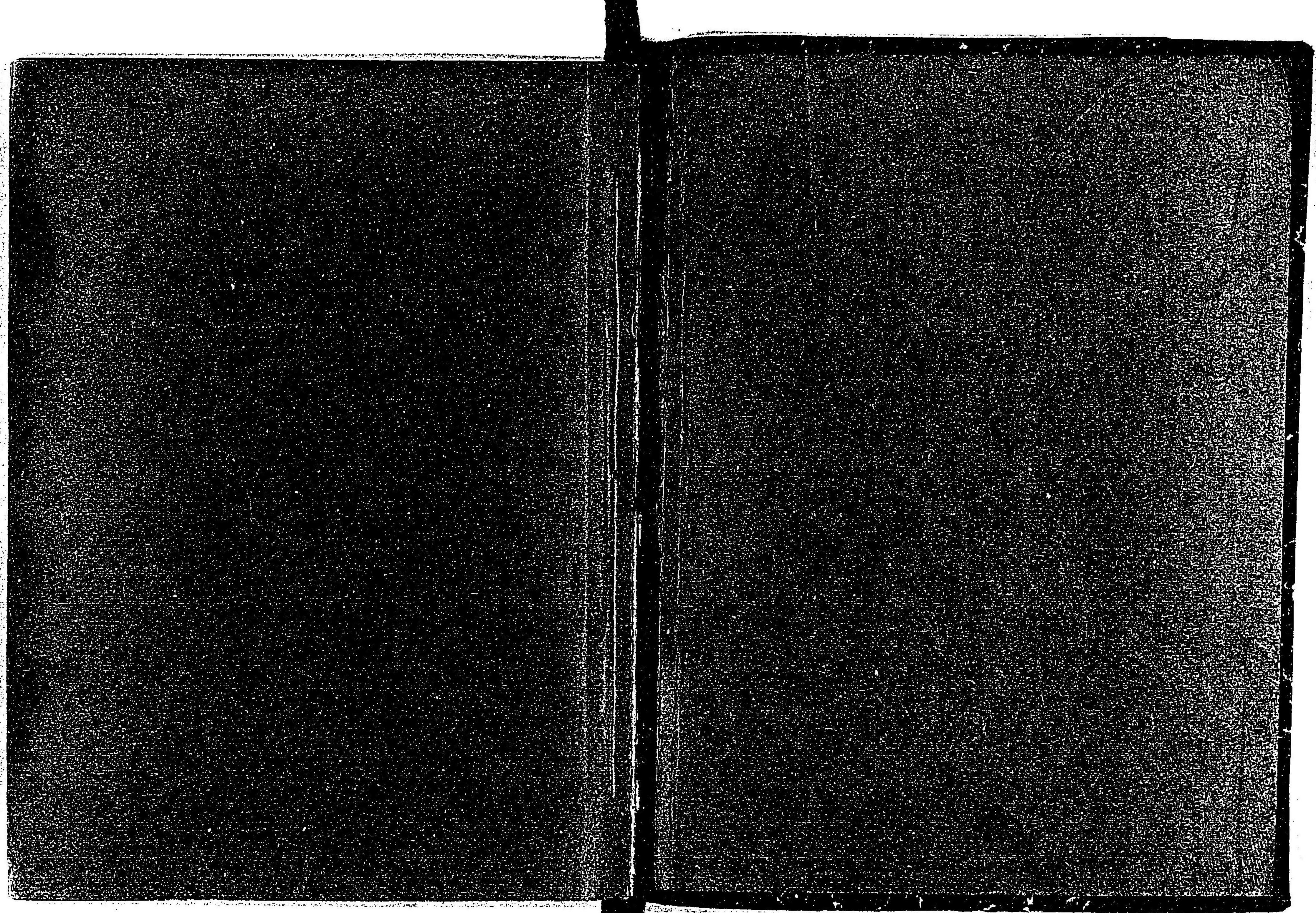
旅の友

神東 惇/編

M32

ADB-0440





神東博編
旅乃友

神東博編



中學書院藏

凡例

一、題して旅之友と言ふ、乃ち眞の旅行者の友となりて、

彼を慰め、聊か以て趣味と實益とを興へ

彼を誡め、彼は教
んと欲するなり。

本書は余が昨夏休暇の砌編纂したるものにして、爾來篋底に埋

むること殆ど一年、今やこゝに發行するに臨み、増補す可き点

素より少からざりしも、そは再版の際に於てすべし。

一、本書掲ぐる所の旅行と健康、旅行と準備、途上の注意等に於て

は Gallon 氏の Art of travel 其他 Hints to travellers 等を參



例

凡

考したる所多し。

一、自然と人に掲載したる美文佳句には、素より遺漏あるべけれど、漸次に増補すべし。

一、本書は純然たる旅行法にはあらずして、只普通一般の旅行者の爲めに編したるものなれば、探検旅行、修學旅行等に關する詳細なる記事は之を省けり。

明治卅二年六月

編者識

旅之友

目次

旅行の目的.....	一
旅行と學問.....	三
旅行と觀察.....	七
旅行と準備.....	十一
旅行と健康.....	十六
旅行の快樂.....	二十
途上の注意.....	二十四
自然と人.....	三十四

山……………三十七

海……………四十六

河……………五十三

霧霞雨……………五十七

雪……………六十四

太陽……………六十七

月……………七十二

曉……………八十二

羈旅……………八十四

風景……………九十七

四季……………百〇六

旅之友

神東 惇編

旅行の目的

弓に一張一弛あり、馬に一馳一息あり、弓これあるが爲めに恒に
 勁くして能く百騎を殫す、馬これあるが爲めに恒に健にして能く千
 里を馳す、弓にして一弛なくんば弦遂に断つべく、馬にして一息な
 くんば脚遂に折れん、凡そ人の世に於ける亦斯くの如く、常に勤む

るものは又常に遊ばざる可からず、能く學び、能く遊ぶとは即ちこ
 の關係を意味するものにして、人はこれあるが故に能くその目的を
 達し得べきなり、換言すれば遊ぶとは學ぶの謂にして、學ぶとは其

裏面に既に遊ぶてふ事を顯はせるなり、遊ばず學ばざるの徒は生涯
途に何事をもなすなくして終らんのみ、然れども其遊んで快樂を得
るに當り、徳義を缺くことなくして最も利益に、最も健康に益する
ものを選択に非ざれば、往々甚だしき弊害を來すことあり、思ふに
世上幾多の快樂を得る方法ありと雖も、俗的の所謂快樂なるものは、
概ね徳義と利益と攝生とを併有せざるが如く、一を有するものは他
を缺き、利益あるもの必ずしも健康に益なきが如し、然らば吾人は
如何なるものに依て之を得んか、吾人は實に旅行して之を得るに
かざるなり。

旅行は人をしてよく自然と同化せしむ、彼の山の秀靈ある、此の
水の瀟灑なる、人をして無限の快樂を覺せしむると同時に、無限の

利益と、趣味とを齎らすもの、しかも聊も徳義を損するなし、吾人
が暇ある毎に旅行を企つるも亦これがためのみ、この高潔なる快樂
を得、實際的の利益を得、身体を健全にし、精神を快潤にし、廣
遠の氣象を勃興せしめ、自然の趣味を大覺せんが爲めのみ、何ぞ他
あらんや。

林間松韻石上泉聲。靜裡聽來識天地自然鳴佩。

草際煙光水心雲影。閒中觀去見乾坤最上文章。 洪 自 誠

旅行と學問

旅行は活ける學問なり、日常讀書より得來りたる百般の智識を實
踐に問ふ唯一の好機會なり、吾人は常に地質學書によりて火成岩現

出の状態を知る、如何なるものを縦谷と云ひ如何なるものを横谷と云ふやを知る、しかも實地に付きてこれを解する能はずんば數百頁の地質學書も亦一小説と何ぞ擇ばん、吾人は動物學書を繕きてよく昆虫類の特徴、分類、雌雄の別を知り、如何なるものを腔腸動物といひ如何なるものを海綿動物と云ふやを學べり、只試験場裡に於ては能く自然淘汰を論じ本能の作用を記す、しかも實踐に際して一々之れを説明する能はずんば、數部の動物學書一冊の進化論も只畫餅に等しさのみ、吾人は遂に蠹魚の譏を免れざるべし、要するに學問は實際と相俟て初めて其光輝をあぐるものにして旅行は實に諸般のものに對して實踐の餘地を與ふるものなり、換言すれば天地はあらゆる學問あらゆる事物の一大實驗場にして、旅行なるものは實に其實

驗場の門戸を開きて吾人の中に導くものなり、而して書物は只其案内記あるのみ情況報告書あるのみ、誰か言ふ旅行はたゞ一種の娛樂なりと、吾人は既に自然の設けたる自由の大實驗場に入る、其好む所に任せて研究し觀察するも人は敢て吾を妨げざるなり、而して彼等は却て其一の研究するなく一の觀察するなく手を拱して呆然過ぐるものを目して愚と笑はんのみ。

山に登りて雲の美、水の奇、石の妙を探りては如何に自然力の水に及ぼせるかを思ひ、動物の性狀、植物の分布を觀察しては自然の配合、造化の妙を味ひ、海邊に彷徨ひては海洋の作用、波の浸蝕、陸地の構造の如何を究む、何の樂かこれにしかんや、之れによつて山水の美は益々美に、風光の妙は益々妙となる、誰か曰ふ科學的觀察

は自然の美を損ふと、商人は商人として其地の氣候、物産、人民の嗜好等より戸數、人口の多寡、貿易の狀態を考ふるべく、軍人は軍人として其地勢、氣候、土地の構造、人情、物産の如何を究むべし、政治家は政治家として、歴史家は歴史家として各自好む所の觀察を下すべし、しかも或は燎々或は隱々常に是れ等百般の觀察に對して興味と實益とを伴ふものは實に科學的思想の恩澤なりとす。

吾人は既に旅行か如何に吾人を自然の大實驗場に誘ひて、各自好む所自由に實驗の材料を供するかを知る、何ぞ慢然として山河を跋渉し只徒らに貴重の光陰と貴重の金をを費すの愚を學ばんや、吾人は將に曰はんとす、旅行せよ旅行して自然の實驗場に入り豊富なる觀察の結果を齎らし來れと。

水流而境無聲得處喧見寂之趣。

山高而雲不碍悟出有入無之機。

洪 自 誠

旅行と觀察

郊外一二里茅屋二三點菜畝麥隴の間を過ぐるも尙ほ且つ麩包の原植物を知る、況んや身を雲水に委して、朝に白雲雨を讓す高嶺によぢ、夕に怒濤岸を敲む砂濱に彷徨はんか其利其益果して幾何ぞや、脚底に踏む所の大塊、双眸に映する所の花鳥、何れか科學者に研究の材料を貢獻せざるものあらんや、老松の下に立つ孤廟、草徑の中に横はる古墳、何れか史學家の一顧を値せざるものあらんや、一片の

石斧も人類學者にとりては無上の材料となり一塊の土も地質學家が爲めには千金よりも貴ばる、況んや偉大なる発見は往々些少なる事故に基く事ゐるをや、何人も砂濱に打ちよする海草を見る、しかも是れによりて新世界を発見せしは只コロンバスあるのみ、何人も沸々鉄瓶より騰る水蒸氣を見る、しかもこれによりて蒸氣機關を發明せしは只ワットあるのみ、天は長へに地は窮りなく汝が行き汝が向ふ所に任す、山に登りて石を踏み雲を吸ひ、野を過ぎて花を見鳥を聞き、里に下りて寺を訪ひ人と語る自然の眞理造化の機密は隠々其間に存す、汝恣まゝに是れを發くも可なりこれを究むるも可なり。然れどもコロンバスは茫然海岸に彷徨ひて遂に新世界の觀念を得しに非ず、ワットは無心に水蒸氣の立つを見て蒸氣の作用を悟りしに非

ず、素より胸中不斷の用意と一片の注意心を有せしが故のみ、而して其注意は遂に觀察を導き觀察は頓て発見を生せしなり、腦中一片の注意心なからんか稻田萬頃の中を辿るも遂に米の植物をだも知る能はざるべし、ニウトンの林檎に於ける、フアラデーの電氣に於ける皆しからざるはなし、初めは只一瞥の注意のみ頓て興味と觀察とを齎らし遂に発見發明となる。

人は生れて呱呱の聲を放ちてより死して墳墓に入る迄、一日も徒らに費す時日とはあくして、常に不斷の用意をなさいる可からず、旅行も亦小さき生涯なりいかで用意なく徒らに金と時とを費さんや、況んや生涯の最も多くの時日を費す住居の周圍は比較的變化少なきに旅行に於ては少時の間に無限の變化あるをや。

山に登れば翠雲あり涼霞あり、奇巖あり怪石あり、見なれざる植物、珍らしき動物、湓流の潺湲、瀑布の鞞鞞、凡て汝が科學思想を呼び起して其注意と觀察とを待つものゝ如し、海に浮べば盆石の如き島あり、山の如き怒濤あり、波に漂ふ海草あれば巖苔の中に隠るゝ魚介あり、凡て汝が見汝が取るに任す、野を行けば嬋妍たる草花あり囀々たる鳥聲あり、綠蔭細流あり青嵐彩霞あり、里を過ぐれば癡寺あり孤墳あり、人情の美風俗の奇、以て探るべく以て究むべし。

思ふに旅行はあらゆる觀察をなすべき好機會にして、凡ての局面に向て觀察の好材料を捧ぐるものなるが如し、旅行して觀察を下す能はざるものは、門に入て未だ堂に上らざるもの、寶の山に登て寶

石を得さるの徒のみ。

山居胸次清洒觸物皆有佳思。見孤雲野鶴而起超絶之想。遇石澗流泉而動澡雪之思。撫差檜寒梅而勁節挺立。侶沙鷗麋鹿而機心頓忘。若一走入塵寰無論物不相關。即此身亦屬贅旒矣。

洪 自 誠

旅行と準備

朝に出て、夕に歸る一二日の旅行十數里内の遠足に於ては、未だ必ずしも充分なる準備を要せずと雖も、苟しくも十數日より數月に亘りて數十百里外の地に、旅行を企て探検を試むる者にありては、これに對する相等の準備なるべからず、必要の時に當りてこれに應

旅之友

するものなかりせば大なる不便と不愉快とを感ずるなるべし、此不便と不愉快とを避けんと欲せば旅行するに先ちて豫め携帯品の目録を作り置き之れによりて物品を整ふるをよしとす、而して携帯品を結束するに當り、大なる注意を下さざれば整頓を缺き混亂して不自由を感ずるに至るべし、第一日々必用なる物品は共に荷造りし密接して互に破損し易きものは可成的携へ行かざるをよしとす、玻璃壘の如きものは別に小なる箱に入れ爆發物等は他物と離し置くを要す、第二旅中最も必要なるもの、外に不必要のものを携へ行くは徒らに行李を大且つ重くならしめ決して節用を得たるものに非ず、出来得べくんば一物にして二途若くは數途に利用し得るものを選択するをよしとす、荷物の輕便ならざるは旅中大に不自由を感ずるも

旅行と準備

のにして之が爲め探るべき勝地も已を得ず斷念せざるを得ざるに至ることあり、又携帯品の詳品なる目録を携へ行きて時々其れにつき携帯品を調査するをよしとす。

今普通の旅行に必要なる携帯品の主なるものを上ぐれば左の如し。

- | | | | |
|-------------------|--------|-----------------|-----|
| ○ ランド | 釣床 | ○ 長靴 | ○脚絆 |
| 靴足袋 | 防水布製雨衣 | ○ 手拭 | 手套 |
| ○ ハンカチ | ○手拭 | 風呂敷 | 毛布 |
| ○ 足袋 | 草鞋 | 傘 | 瀝袋 |
| 提灯 | 燭 | 小刀 | 双眼鏡 |
| ○ 洋石 | 斧 | 鋸 | 鎖 |
| 蠟燭 | 細引 | マツチ | 紙 |

旅 之 友

- | | | | |
|------|-----|----|------|
| 筆 | 鉛筆 | 小硯 | 墨 |
| 齒磨粉 | 揚枝 | 時計 | 内外用劑 |
| 興奮劑 | 除虫粉 | 石礮 | 手帳 |
| 水嚢 | 印記 | 地圖 | 旅費 |
| 護身用具 | 食料 | 靴 | カネ |
- 又脩學旅行者に對しては更に左の品々主なる必要品なるべし
- | | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 六分儀 | 寒暖計 | 晴雨計 | 製圖器 |
| 書籍 | 經緯儀 | 望遠鏡 | 傾斜器 |
| 寫真器 | 水準器 | 採集網 | 採集壘 |
| ペン | 採集函 | 錫函 | 夾板 |
| 鉄鎚 | 虫眼鏡 | 穿土錐 | 寫字帳 |

旅 行 と 準 備

其他酒、煙草を嗜むものは適宜携へ行くべし、衣服の材料は種々あれど「フラネル」、木綿、「リンデン」、革等をよしとす、「フラネル」の「シヤツ」は健康上「リンデン」のものより遙かに優る、其色に至ては暗色のものは淡色のものに比して一倍以上の熱を吸収するものにして、夏日々中黒の衣を着するときには甚だ暑し雖ども、白色に代ふれば比較的冷なるものなれば、其旅行當時の氣候等により適宜に撰ぶをよしとす、寒氣を防がん爲めに衣服を重用するに際し之を緊密に着するときには、体温を失ふこと比較的多きものなれば、緩やかに着用して各層間に空隙を存しぬをよしとす、最も輕快なる服装は洋服に半「ツボン」を着し脚絆草鞋を穿ちたるものをよしとす、地圖は參謀本部陸地測量部出版二十萬分の一、若くは二萬分の一のものを

用ふべし、少しく携帯に不便ありと雖も詳細にして正確なるこれに優るものあるあり。

孤雲出岫去留一無所係。朗鏡懸空靜躁兩不相干。

洪 自 誠

旅行と健康

旅行は素より身体を強壯にするとは雖も、一方に於て耳目の變化と共に衣食住氣候等諸般の變化を來すものなれば、健全なる人と雖も時に或は健康を損ふことあり況んや薄弱なる人に於てをや、假令身を山紫水明の境に處して風光の明媚に對すると雖も、一度身体を損ひて一點苦痛を覺ゆるときは、愉快と利益とは其大半を消失し去

旅 行 と 健 康

らるゝものにして、孤身旅燈影暗き下に呻吟する如き悲しむべき境遇に沈むに至ては嘗に自己の健康を損ひ不利を招き悲嘆を重ねるのみならず、同伴友人等に對しても非常なる迷惑を被らせ、郷里の父母朋友に向て甚だしき心配をかくるものなれば、旅行の途中は極めて身体に注意し、好奇心に驅られて無用の危険を冒し、或は自己の健康を誇りて徒らに不養生をなし不慮の禍を招かざる様用心すべし、今左に養生の主なるものを記さんとす。

◎日中太陽の光線直射するときは必ず笠、帽子等を被りて朝夕日光斜に射來るときは笠の縁より布を下げて之を遮るべし。

◎力めて寒冷濕潤を避け、炎熱の候に於て急に寒冷なる水に入るべからず。

◎食物飲料の量及び性質は能く注意に注意を加へて之を定め、未だ一度も味ひしことなき食物、果實等はなるべく避くるをよしとす。

◎太陽の烈しき光線の閃々煌くより時として目を害し又雪のさらめくより目を損ふことあり、之を避くる最良の方法は眼鏡を以て之を保護するに若かず、其眼鏡は黒色のものをよしとす、又普通の眼鏡を不透明質の物を以て塗抹し中央に水平なる細き間隙を残したるものを用ゆるも可なり。

◎船暈に逢ふたるときは、濃厚ある茶、若くは珈琲を飲めば、直ちに平癒すべし。

◎渴するときは、清水を衣服に注ぎて充分に潤すか、若くは木葉等を噛みて唾液を誘出し、然る後飲料を飲むべし、雪は噛むべからず、

却て渴を覺ゆるものなり。

◎誤て毒物を食したるときは、強き吐瀉を飲みて吐出せしめ、もし其効きざるときは、石鹼水、火鹼等を飲み之を吐瀉せしむべし。

◎毒蛇類に咬まれたるときは、紐等を以て其部分を緊束し、口にて場所を吸ひ、速やかに焼藥を以て之れを焼くべし、焼藥なきときは、蟄所に於て少量の火藥を爆發せしめ、又は其部分を「ナイフ」にて切り、白熱したる鉄を觸るべし、はぶ、ひばかり、まむし、等に咬れたるときは、速やかに治療せざれば死に至るべし。

◎黄蜂、さそり等に害せられたるときは、煙管を通じて油をそそぐべし、若しさそり大なるものなるときは、毒蛇に於けると同じ手當をなすべし。

◎夜間安眠をなし得るときは、翌日の旅行に大に影響し疲勞を覺ゆることも甚だしきものなり、これには種々の原因あらんも、多くは過度の暑寒、蚊、蚤、其他の昆虫、茶、珈琲、食物の不消化に基す、就中足部の冷却は最大ある原因なるが如し。

雨餘觀山色景象便覺新妍

夜靜聽鐘聲音響尤爲後清越

洪自誠

旅行の快樂

旅行は耳目居住の變化を意味す、然して此變化は常に一種の快樂を伴ふものなり、凡そ樂の後に来る樂は、更に愉快を感ずること少なくして、苦の後に來る樂は愉快を感ずること大なり、畢竟苦樂は比

較的の言葉にして苦あればこそ初めて樂を感ずるなれ、平民的旅行の紳士の旅行に比して、一層愉快を感ずることあるは實に此間の關係を意味するなり。

若し夫れ春曉淡霞未だ晴れず、鉄脚七寸の草鞋を穿つて、雲中に語れる雲雀の聲をきくつゝ、花を尋ねて露冷やかなる草徑を過ぐれば、怪しむべし春風何方よりか清香を送り來る、正にこれ「花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」の如きあり。

客舍孤衾寂寥夢ははす天涯古郷の空、忽ちにして聞く驟雨沛然として枕に響くを、驚き起て窓を排せば、雨既に過ぎて浩月天にあり、雨後の樹木更に青緑、炎蒸を一掃し去て清涼の氣人に迫る、實に是れ脩然一雨送輕颺、客夢驚回夜寂寥、剛道是晴還未信、擔聲和月落芭蕉の觀。

峻坂登り盡して氣息喘々、汗は背を浸して舌將に燥かんとす、忽ち見る路傍清泉の迸るあるを、馳せてこれに赴き一掬連飲すれば、清凉骨に徹してまた人寰のものに非ず。

漸くにして峯に攀づ、空翠衣を濕して征衣の袖冷やかなり、仰て白雲の峯角に相追ふを望み、伏して群嶺の脚下にあつまるを見る、忽ちにして輕風一颯雲を送り來りて、身はいつしか白雲場裡の人となる、前者影を失ひ、後者亦其居る所を知らず、四顧冥漠只吾獨り天地の間を辿る、さながら羽化して登仙するの思あり。

雪は疾風に乘じて頬を舐りて去り、日は既に暮れんとして旅舎遙かなり、前程來路人影なく孤劍單騎寂莫の中に迷ふ、忽ちにして一光あり、林をぬれて到る、馳せて之に近づけば即ち樵屋なり、入て

宿りを請へば、老翁我を爐邊に導き、更に粗朶を添へて猪肉を炙る。原頭夜寒くして霜冷やかなり、枯葉を焚きて暖をとり、芋をくべて空腹を醫す、

獨り綠蔭の下に横はり、溪琴を耳にして詩を讀む、塵寰遠く去て雲漸く近し、鳥鳴て山更に靜なるを覺ゆ。

凡そ旅行の快樂は、之を記し來れば實に窮りなしと雖と、皆な自然の美、造化の妙のわが心の琴線に觸るゝより起るものにして、其高潔なる到底紅塵萬丈の下に美人、醇酒、弄花等を是れ事とせる、輕薄男子の夢にだも窺ふ能はざる所なるべし、由來俗的快樂は徳義、名譽、利益と逆行し、反比す、しかも旅行の快樂は順行し、正比す、然して其最も愉快に、最も自然らしく、最も天真なるものは、主と

して平民的旅行あるなり、平民的旅行にあるかな

詩思在瀾陵橋上。微吟就林岫便已浩然。

野興在鏡湖曲邊。獨往時山川自相映發。

松間邊携杖獨行立處雲生破衲 竹窓下枕書高臥覺時月侵寒氈

洪 自 誠

旅 の 友

途上の注意

◎風雨烈しきとき、又は氷雪の溶解するに當りて、秩父岩若くは石
灰岩質の山中に入るときは、往々岩石の崩壊することあれば、注意
せざるべからず。

◎急湍奔流を渉るには、石を持ち、身體の重量を重くしつゝ渉るを

よしとす。

◎山中等にて露宿するに當りては、空氣の流通よき乾燥せる場所を
撰ぶべし。

◎歩行中草鞋一方に偏して、摩滅したるときは、甚だ不愉快にして、
之か爲めに、マメを生ずることあれば、速やかに左右履を替ふべし。
靴づれになやむ人は、足に石稔等をぬりて、然る後靴を穿つべし。

◎マメを足に生ずるは長時の旅行の間に足袋のヒダ、靴の内面の粗
なるより起ること多し、ふは素より足袋靴等の撰擇必要なれども、
其生じたるときは清潔なる針等にて之を刺し汁をしぼり後膏藥をは
り置くべし。

◎出發前には指の爪を切るべからず然らざれば途上草鞋をはき物を

途 上 の 注 意

旅の友

解く等に困難すること多し。

◎茫々たる原野等を過ぐるとき、目標を定めずして進行する時は、自から左方に曲り行く事あれば、時々高所に登り、或は樹木に攀じて、地勢と方向とを考へ、進路を誤らざる様にすべし。

◎進行中飲料水の缺乏したるときは樹木の繁茂せる所に赴きて水を見出すべし。

◎二人以上にて氷雪の上を行くときは、細引を以て各身體を連結し、一二間前後の間隔をとりて進むべし、萬一一人誤て氷雪の崩壊すると共に断崖より踏み外す等のことあるも、安全なるべし。

◎出發の初めには、急ぎて速やかに歩行せざるをよしとす、又歩行中も急ぎて速やかに疲れ、時々休息するよりも、徐々に進みて休息

せざるをよしとす。

◎朝には早く出て、夕には早く旅宿につき、夜は常に充分に睡眠すべし。

◎旅舎はなるべく善良なるものを撰び投宿すべし、宿引の言に迷ふて後悔せざる様注意すべし、旅舎に達したるときは必らず家に報告すべし。

◎旅行が少生涯なると同じく、旅中の日記は一身の歴史の一部分なれば、旅行家は常に之を携へ、毎夜床に入るに先ち、其日の出来事を記せざる可からず、然して旅行日記は後日これを開き見るに際して、無限の愉快を覺ゆるものなり。

◎今左に馬琴及び三千風が、自己の經驗によりて書きたる旅行途上

途上の注意

一歩もはこびがたし。

一、晝の食事は一二杯づゝ食ひ、空腹にならばいくたびも少しづつ食ふべし、大食をすれば道をやきがたし。

一、小休の時、オシアトミソハカカ〜と三べんづゝ唱へて其席をたつべし、かくすれば物を忘れず、然れども宿問屋、こみ合人足は荷をかつきてかけ出すに、たぐれじこ心あはてたるときは、そのオシアトミソハカカ〜を忘るゝものなり、予も百日の旅中にきせる二本、手拭一すじ、笠一かいをうしなひぬ、道はひたすら早からんことをたもはず、たぐれじこたらじこゆ〜と、かくすればたのづからはやし。

一、夏の旅は馬に乗るへからず、夏の馬は蠅にくるしむ故たのづからあらし、乗人もかならず睡眠をもよほすものなり、故に夏馬にのべれ落る人多し。

一、草臥て馬に乗るは大きな損なり、馬にも駕にも朝のうち乗るへし、朝は假も安し晝より後泊りの驛、程ちかければ、足の運びたのづからはかどりてすゝむものなり、然れども朝のうち足をやすませれば、草臥格別にして翌日ものゝ用に立ちがたし、

出立より五六日めにしてはじめて足の定まるものぞかし。

行脚の覚悟

三千風

行脚の覚悟として、自戒自愼の警語して首にかけし條目。

一、不惜身命を思ひ定め今日切りの境界、無常迅速、夢幻泡影、忘れまじき事。

一、色慾、身慾、名聞慾を可離事、憍慢心可愼事。

一、五戒勿論也、但し飲酒妄語の二戒は事によるへし、他の爲善事には偽も可なるへき事。

一、山賊追剽等に逢は、裸にて渡すべし、若し殺害に及ば、首をのへて待つへし、死にて敵を取るまじき事、附四寸の小刀の外刀を持間敷事。

一、衣食居は天道にまかすべし、當季の外衣は可捨事。

一、船賃木ちん茶代少しもれざるまじき事。

一、中途にて乞食非人に慈悲を加ふへし、且つ病人には所持の藥可與事。

一、文筆所望なきに書まじき事、但し望む人あらば貴賤を不撰一言も否といふ詞出さず間敷

也自作外他作の文法書問敷事、

旅の友

一、一足も馬駕にのるまじき事。但し不及山上の道は折によるへし。

右の九ヶ條神佛に誓ひ心戒を定むるもの也。若し此趣意を破る心ざし世でなば、即歩に立歸るへし、若し病死する事あらば行脚の日記と此箇條を古卿へ送り給ふへし。

死て後屍の事は任他取置てには烏狼

産國豊州射和村大淀氏三千風判

諸國旅宿衆中

素より文明と未開の別あり、汽車駕籠の差あり、厭世觀と樂天主義の異なるあり、必ずしも悉くとるべからざるあり。

讀易曉窓丹砂研松間之露 談經午案寶磬宣竹下之風

洪自誠



若しうれ氣倦み、足疲れんか

綠蔭の下、石泉の邊

青苔の露を拂ふて、靜かにこれを讀め。

自然と人

山 海 河 霧、霞、雨 雪

太陽 月 曉 霧 旅 風景

- Mankind unto tentations charity.
2. With arm in arm the forest rose on high,
And lesson gave of brotherly regard;
And, on the rugged mountain brow exposed,
Fearing the blast alone, the ancient oak
Stood, lifting high his mighty arm, and still
To courage in distress exhorted loud.
The flocks, the herds, the birds, the streams, the breeze,
Attuned the heart to melody and love.
 3. Mercy stood in the cloud, with eye that wept
Essential love; and, from her glorious brow,
Bending to kiss the earth in token of peace,
With her own lips, her gracious lips, which God
Of sweetest scent made, she whispered still,
She whispered to Revenge, Forgive! forgive!
 4. The Sun, rejoicing round the earth, announced
Daily the wisdom, power, and love of God.
The Moon awoke, and, from her maiden face
Shedding her cloudy locks, looked meekly forth,
And, with her virgin stars, walked in the heavens,—
Walked mightily there, conversing as she walked
Of purity, and holiness, and God.
 5. In dreams and visions, sleep instructed much.
Day uttered speech to day, and night to night
Taught knowledge: silence had a tongue: the grave,
The darkness, and the lonely waste, had each
A tongue, that ever said, Man! think of God!
Think of thyself! think of eternity!
 6. Fear God, the thunders said; Fear God, the waves;
Fear God, the lighting of the storm replied;

ECHOES

How sweet the answer Echo makes
To Music at night
When, roused by lute or horn, she wakes,
And far away o'er lawns and lakes
Goes answering light!

Yet Love hath echoes truer far
And far more sweet
Than e'er, beneath the moonlight's star,
Of horn or lute or soft guitar
The songs repeat.

'Tis when the sigh,—in youth sincere
And only then,
The Sigh that's breathed for one to hear—
Is by that one, that only Dear
Breathed back again.

T. Moore.

TEACHINGS OF NATURE

Pollok.

1. The seasons came and went, and went and came,
To teach men gratitude; and, as they passed,
Gave warning of the lapse of time, that else
Had stolen unheeded by: the gentle flowers
Retired, and, stooping o'er the wilderness,
Talked of humility, and peace, and love.
The dews came down unseen at evening tide
And silently their bounties shed, to teach

Fear God, deep loudly answered back to deep.
And, in the temples of the Holy One,
Messiah's messengers, the Bible opened,
And cried: Repent! repent, ye Sons of Men!
Believe, be loved.



山

只地球表面上の皺波のみ、しかも聳えては峨々として高く天邊に
懸れる高峯亂嶽となり、延びては依々として遠く起伏せる連山岡丘
となり、雲の美水の奇、石の妙これに依て相映發し、大造し會々詩
人の琴線に觸れて文となり、歌となり、詩となる。

◎頃は二月始のことなれば、峯の雪村消えて花かど見ゆる所もあり
谷の鶯音づれて霞に迷ふ處もあり、登れば白雪皓々として聳え、下
れば青山峨々として岸高し、松の雪だに消ゆるやらで苔の細道幽な
り、(平語)

◎また曉より足柄をこゆ、まいて山の中の恐ろしげなる事はんか
たなし、雲は足の下にふまる、山の香からはかりの木の下のあづか

旅の友

あるに、葵の唯三筋ばかりあるを、世はなれてかゝる山中にしも生ひけんよと、人々あはれがる (更科日記)

◎連山の波濤に似たる、青葱として蒼きあり、白きもありて、尖からぬ晴巒既に霞をこめ、礮道稍々春深し、人聚りて岡愈々高く、鳥啼て谷の深さを知る、寛歩して到る處興あらずと云ふ事なし (馬琴)

◎月は半輪の雲もなく、山には萬樹の影あり、鑿々たる水の音、颯々たる松の聲、腸を斷つ媒なるに、鹿は峯上に鳴きて白露の霜となるを悲しみ、猴は幽谷に叫びて孤客の夜衾を寒からしむ (全上)

◎疎林枝を交えて僅に翠微を見はし、白雲出沒して高く峯上にかゝるめり、溪は落葉に降り埋もれて、音はすれども水を見ず、鳥は古巢に出て行きけん、塵稀にして影遠かり、羊腸たる樵路に枯草を結

自然と人

びけるは、是れ何人がせし枝柝にぞ、嵯峨たる山の峽に、怪松の生ひ出てたるは造化の功なせるなり、山静かにして短晷を覺ゆす、巖累なりて長羅にすかる (全上)

◎片山蔭に春暮れて、酷暑に堪ぬぬ六月のはじめつかたになるものから、峯吹き下す朝の風、軒端にかゝる夕の雲、露れては月を搔き流す、背戸の笕の水音さへに夏を忘るゝよすかあり (全上)

◎月は山峽を離れて霜の厚さを覺ゆ、影は谿谷に隈ありて夜の深さを知る、見上ぐれば青壁の千仞なる白雲横はりて野婆の帽子かと疑はれ、見下せば深谷幽靜にて葛藤の長へなる久目路の棧かと怪まる (全上)

◎山は慶雲を吐て奇峯を累ね、風は松濤を起して彈琴に似たり、靈

芝石につきて五彩眼に美しく、異禽幽谷より出て、友を求むる聲あり（全上）

旅の友

◎煙翠色を埋めて千里に連り日晴嵐を射て一方に聳ゆ、危嶺筈を學んで風木葉を欲、懸瀑布をいれて水聲礎を打つ、峯崎嶇して劍を樹てたるが如く道廻りて羊の腸に似たり、且に牧笛雲を穿て過ぐれば夕に樵歌月を帶て往く、或は塊石頭上にありて蹲る虎かど驚かれ、又は老松足下に横はりて蟠る龍とも言ひつべし、頭を廻らせば山嶮遠くして重疊、耳を欬つれば猿猴鳴て寂寞、數株の松柏森々と茂り、晝も日影を漏さねば、苔滑かにして常に雨の後の如く、暗きこと月なき夜に似たり（種彦）

◎巖峙て鋭き劍の如く、道めぐつて羊の腸に似たり、峯には老松枝聳ひて朝一片の雲にむせび、谷には瀑川石流れて夜孤林の月を碎く（近松）

自然と人

◎なまよみの、甲斐の國、打寄する駿河の國と、こちこちの、國のみなかゆ、出てたてる、富士の高根は、天雲も、いさゆきはかり、飛ぶ鳥も、とびものほらす、ゆる火を、雪もてけち、ふる雪を、火もてけちつゝ、言ひもぬす、名づけも知らず、あやしくも、います神かも、せの海と、名つけてあるも、その山の、つゝめる海ぞ富士河と、人のわたるも、其山の、水のださちぞ、日の本の、山どの、くじの鎮めども、います神かも、寶ども、なれる山かも、駿河なる、富士の高根は、見れど飽かぬかも、

富士の根にふりおける雪はみな月の

望にけぬれば其夜ふりけり

讀人不知

心あてに見し白雲は麓にて

思はぬ空に晴るゝ富士の根

春海

群山の高根々々を傳ひきて

富士の裾野のかゝる白雲

景樹

見渡せば白ゆふかけて咲にけり

神岡山の初櫻花

宗尊親玉

旅の友

駿河なる宗津すけの山邊のうつゝにも

夢にも人に逢はぬありけり

業平

玉くしげはこねの山の嶺深く

水海みわた澄める月かけ

慶融

むは玉のくろかみ山を朝越わた

木の下露にぬれにけるかな

人丸

時しらぬ山はふしの根いつとてか

鹿のこまたらに雪の降るらん

自然と人

業平

くれて行く秋や悲しき嵐吹く

小松が嶺に鹿の鳴くある

定頼

みよしの山へに咲ける櫻花

雪かどのみぞあやまたれける

友則

仙客來遊雲外嶺、
神龍栖老洞中淵、

雲如紈素烟如柄、
白扇倒懸東海天、

石川丈山

白雲山上白雲飛、
幾戶人家倚翠微、

行盡白雲々裡路、
滿身還帶白雲歸、

大宰春臺

遠上寒山石徑斜、
白雲生處有人家、

停車坐愛楓林晚、
霜葉紅於二月花、

杜牧

天風吹我上層岡、
露灑長松六月涼、

願借老僧衣白鶴、
碧雲深處共翱翔、

戴叔倫

忽看斜日暗窓間、
回望雲遮檐外山、

應是清風吹雨至、
野夫時負薪柴還、

蟠松

自 然 人

旅 の 友

晴虹一帯界屏顔、

夕照斜明蒼翠間、

雲意猶留餘興在、

載將殘雨過佗山、

山路來て何やらゆかし葦草

頼山陽
芭蕉

笠山やまつ夕立の迹どころ

全

富士にかゝる雪紫の春べかな

關更

短夜や雲引き残すふしの峯

太祇

旅之友

海

地獄の凹處無限の盪水を堪へて海となり、交通の大連鎖たり、水蒸氣の大本源たり、島あり、波あり、風に任する白帆あれば、水に睡る白鷗あり、其の蒼や、天の碧、山の青と相調和して、自然の美

を大造し來る。

◎黒崎の松原を経て行く、所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪の雪の如くに白く、具のいろは蘇枋にて五色に今ひと色ぞたらぬ。(土佐日記)

◎浪の聲、秋の風にはなほひびきことあり、盪やく烟かすかにたかびきて、とりあつめたる所のさまなり。(源語)

◎頃は秋の初めにして、殘暑烈しき折りあるに、吹く風衣を徹して人皆汗を忘れ、雪は富士が峯に降りしきて、四時のなかめも目前なり、なほ頭を回らして見上ぐれば、南に久能山あり、西に田子清見瀉あり、三穗の松原磯馴れし松も、吾が齡に算ふれば、いくそばくその其數も知られて、盪焼く海人の烟さへ。晝にはかくとも筆には更に

自然と人

及びがたし。(馬琴)

◎緑波岸を洗ふて鴻を驚かし、白雲水に映じて松倒に立てり、見上れば明月海より昇り、見下ろせば漁舟巖にかゝる、潮風に戦ぐ蘆の穂はわれを招くかど疑はれ、夕霧にかくる遠山は造化の黒繪を見るが如し。(馬琴)

◎夏を忘るゝ浦風に、蘆の葉戦きて夕陽の影を紊し、水や天なる走り帆に、沙鳥飛んで江山の雲に入る、江に臨み石に坐するとき、萬事只無心なり、竿を揚げ綸を垂るゝ時、三公にも換へがたしと、古人のひ云けむ宜なるかな、一波動きて萬波皆徒ひ、細鱗踊て巨魚あるを知る。(馬琴)

◎漁村の柳風に靡きて、簑はす門の夕日影、苫屋の烟空に消えて、

呼ぶ鴈浪に浴す、或は兼葭の戦ぐ所、魚を踏む白鷺見はれ、一葉撃ぐ槓のうらには、羽を曝す鷗鷺あり、長汀弓の如く入江に續き、浮洲箭に似たる水滲たてり。(全上)

箱根路を我こゝくれば伊豆の海や

沖の小島に波のよるみゆ

謙倉右大臣

咲き匂ふちくさの浦の汐風に

秋はいろくの浪をよせくる

定家

わかぬ浦に汐みちくればかたをなみ

芦へをさしてたつ鳴き渡る

THE SEA

The sea! The Sea! The open Sea!
The blue, the fresh, the ever free!
Without a mark, without a bound,
It runneth the earth's wide regions round;
It plays with the clouds; it mocks the skies;
Or like a cradled creature lies.

I'm on the Sea! I'm on the Sea!
I am where I would ever be;
With the blue above, and the blue below,
And silence wheresoe'er I go;
If a storm should come and awake the deep,
What matter? I shall ride and sleep.

I love (oh! how I love) to ride
On the fierce foaming bursting tide,
When every mad wave drowns the moon,
Or whistles aloft his tempest tune,
And tells how goeth the world below,
And why the south-west blasts do blow.

I never was on the dull tame shore,
But I lov'd the great Sea more and more,
And backwards flew to her billowy breast,
Like a birds that seeketh its mother's nest
And a mother she was, and is to me;
For I was born on the open Sea!

The waves were white, and red the morn,
In the noisy hour when I was born;
And the whale it whistled, the porpoise rolled,

住吉の松を秋風吹くからに

聲うちそふる沖津白波

神風やいせの濱萩折りふせて

旅ねやすらんあらま濱へに

赤

躬

讀

人

恒

人

不

知

And the dolphins bared their backs of gold;
And never was heard such an outcry wild
As welcomed to life the Ocean-child!

I've lived since them, in calm and strife,
Full fifty summers a sailor's life,
With wealth to spend and a power to range,
But never have sought, nor sighed for change;
And Death, whenever he come to me,
Shall come on the wild unbounded Sea!

Barry Cornwall.



河

初めは流水晶明にして静にか落葉の下を過ぎ、漸くにして玉を散らし石を轉じて亂嶽の間を流れ、中頃平原の中を緩流して水漸く廣く、遂に平流渺瀰滾々として海に入る、此の間舟筏往來し、魚鳥游遊し、樹木影を涵す、沿岸の風物千差萬別、往々文人の詩囊をしぼる。

◎山のかたの霞隔て、寒き洲崎に立てるかさゝぎの姿も、所がらはいとをかしうみゆるに、宇治橋のはるくと見わたさるゝに、柴つみ舟の、ところ／＼に行きさちかひたるなど、ほのかにて目馴れぬこといものみ、とりあつめたる所なれば。(源語)

◎夜は早や明けし横雲の、色紙めきたるに筆はなけれど、誰が硯せし墨田河、向ひに黒き牛島は、宛も水に臥せるが如く、彼方に蒼き

旅 之 友

柳島は、糸よる濤に靡くに似たり、世の中は何に譬へん朝開趾なき
如くと満誓が、詠みたる歌はしら波に、漁翁生涯一葉の舟、東へ漕
ぐあり、西にかゝるあり、葛西村落幾戸の烟、南にたつあり、北に
滅ゆるあり。(馬琴)

◎里遠さかる新刀根河原、頃は卯月晦日の事なれば、卯の花くだし
霧れながら、あやめもわかぬ暗き夜に、岸うつ波の音高く、居越のか
もの羽たしくのみ。(馬琴)

◎遠近を見めぐるに、散りもはじめず、咲きものこらず、爛熳たる
花の梢は淀川の波に映じ、漁翁舟を轉らすれば雪上に掉さし、樵夫
樹下に嘯けば雪に入るかどあやまたる。(全上)

東路のゆさかを越えて見渡せば

鹽木流るゝ早川の水

安嘉門院

見渡せば波の玄からみかけてけり

卯の花咲ける玉川の里

さかみ

立田川紅葉亂れて流るめり

渡らは錦中や絶えなん

讀人不知

大和川櫻みたれて流れきぬ

初瀬のかたに嵐吹くらし

衣笠内大臣

自 然 と 人

ちくま川春行く水はすみにけり

消れて幾日の嶺の白雪

順徳院

さみたれの絶えやしぬらん十津川の

浮木傳ひの谷の通ひぢ

前大政大臣

山櫻峰の嵐やわたるらん

細谷河の花の浮橋

北院入道

漁翁

漁翁夜傍西巖宿。

曉汲清湘燃楚竹。

煙消日出不見人。

欵乃一聲山水綠。

廻看天際下中流。

巖上無心雲相逐。

柳宗元

霧、霞、雨。

濛々たる水蒸氣、高くかゝりては雲となり、低く匍ひては霧とあり、霞とある、一度寒冷なる空氣に接し、冷涼なる山岳に觸れんか、遂に雨滴となり下り山を洗ひ森を濕ほし、頓て好材料を詩神に捧ぐ。◎あけくれのほど、あやにくに霧わたりて、空のけはひ冷やかなるに、月は霧に隔てられて、木の下に暗くなまめきたり。(源語)◎河原のほとにて、ほのくと明るに、川霧立ちてゆくさまも見え

旅 之 友

ず、横雲の空ばかりけちめみえていとれもしろし (中務日記)

◎空の色淺みどりにて、うら／＼とのどかなる野べの霞はみかさの
うちまでついくめれど、猶こほれたるにほひ所せげなるに。(狭衣)

◎はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれる
程、繪にいとよくも似たるかき。(源語)

◎ほの／＼とわけゆく朝ほほらけ霞のまより見わたる花の色々、猶
はるに心とまりぬべくにはひわたりても／＼ちどりの囀るも、ふねの
音にれどらぬこ／＼ちして、もの／＼あはれもおもしろさものこらぬほ
どに。(源語)

◎春も彌生になりしかば、花も紅葉もなき浦も、沖の小島の八重霞、
たなびく空は日にまして、吹く風さへに暖かく、旅面白き頃なれば

自 然 と 人

(馬琴)

◎俄にたちいづるむら雲のけしき、いとあやにくにて、おどろ／＼

しう降りくる雨にそひて、さどふく風にとろろも吹きまどはして、
空暗き心地するに、窓を打つ聲あど、めづらしからぬ古事を、うち
ずし給へるむをりからにや。(源語)

◎天俄かにかさくもり雨降り灑きて盆を覆へすが如し、山路なれば
笠宿りする家もなくて、樹の下に佇みつ、晴るゝをまつに、雷の音
ること最と烈しく、電光眼を射て仰ぎみがたし、暫しありて雷聲収ま
り雲晴れて、夕陽山の峽に斜なり (馬琴)

◎しばらくして雨晴れ雲収り、日はいりなから影は尙ほ、海に残り
て波を色とり、梢を傳ふ松の雫、吹き拂ふ風に散る玉は、いさこの

中にまろび入る、山は遠くして翠深く、巖は青くして未だ乾かず

(馬琴)

◎春の雨いと静かに降り、露もたはゝに海棠の眼氣なるには引きかへて、桃の梢は目覺しく残りなく紐解きたり、蒲公英、萱菜、いろく若草の萌え出て、時知り貌もあはれなるを (種彦)

ほのくくと明石の浦の朝霧に

島がくれ行く舟をしを思ふ

人 丸

河霧のたちこめつれば高瀬舟

わけゆく棹の音のみぞずる

行 家

旅 之 友

自 然 三 人

浦近く立つ朝さりはもしはやく

烟りどのみそみぬわたるかな

讀 人 不 知

逢坂の關の杉村さりとめて

しらみかねたる有あけの月

景 樹

朝ななく早瀬の上に立ちかねて

流れぞ下る宇治のかはざり

直 好

春のさる霞の衣ぬさを薄み

山風にこそみたるへらなれ

旅 之 友

吉野山嶺の白雪うつらぬて

行 平

けさは霞にたちかはるらん

重 之

紫のめもはるくど出る日に

かすみ色こそ武さしの原

真 淵

急がすばねれさらましを旅人の

後より晴るゝ野路の村雨

太 田 道 灌

山めくる雲の下にやなりぬらん

裾野の原に時雨過ぐなり

頼 政

隅田川簑さて下す筏士に

霞むあしたの雨をこそしれ

千 蔭

梅雨に矢はせの渡り絶ぬ果て

旅人多しあはづのゝはら

直 好

夕立は外山に過ぎて涼くも

みるめにかゝる虹のかけはし

千 浪

自 然 と 人

雲迷ふふもとの里の片しくれ

しらす顔なる嶺の月かけ

全

新田山浮雲騒く夕立に

利根の川みつうは濁りせり

真

淵

旅之熱友

雪

浮々たる一抹の白雲、滴々たる數箇の雨粒、空際高く零度以下の氣温に逢いんか、氷結して雪となり、紛々として鷲毛の如く、片々として銀塊に似たり、山や川や森や、林や、悉く水晶宮裏のものとなる。

自 然 と 人

◎時々につけて、人の心をうつすめる、花紅葉の盛りよりも、冬の夜のすめる月に、雪の光あひたる空こそ、あやしう色なきもの、身にしてみても、此世の外の事まで思ひながされ、面白さも哀れさも残らぬをりなれ、すさまじきためこにいひおきけむ、人の心淺さよとて、みすまきあげさせ給ふ。(源語)

◎雪のいと高くはあらで、うすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ、又雪のいと高く降りつみたる夕ぐれより、はしちかうれなじ心なる人二三ばかり、火桶を中にすゑて、物がたりなどする程に、くらうなりぬれば、此方には火もともさぬに、太かたの雪の光いと白う見ゆるに、火箸して灰なごかきすさびて、哀れなるもれかしきもいひあはすることおかしけれ。(枕草紙)

◎雪ふり積りつらゝゐて、谷の小河も音もせず、峯の嵐吹き氷り、瀧の白糸垂氷となりて、皆白妙におしなべて、四方の梢も見えわかず。(平語)

◎今隆寒の折されば、みるく雪雲布き満ちて、雪紛々と降り出し、巖はあやなげに銀の虎を造り奇し、杪は妙に時ならぬ花を開かし、玉塵徑路を埋めて、野も山も皆注連の内かど見ゆるに、風又烈しければ、吹き奪はれじと笠を傾け袖を掻きあはしつゝ。(馬琴)

麓なりけり武藏の原

眞 淵

けさみればみきはの氷埋もれて

太 陽

太陽系の霸王、永久不滅の火爐、一度東海に上るや、萬物に對す

雪のなか行くしら川の水

景 樹

下折にねさめの枕をはたてし

またみぬ雪の音をさくかな

有 功

けさみれば里のありけり遠方の

ゆきにをれふす竹村の奥

千 蔭

旅 之 友

るに公平無私、等しく其温線を配つ、是れあるが爲めに木あり、これあるが爲めに人あり、是れあるが爲めに水あり、是れあるが爲めに我が世界あり。

◎日のいとうらゝかなるに、いつしかと霞わたれる梢どもの、心もどなきなかにも、梅のけしきはみほゝぬみわたれるとりわさて見ゆ
(源語)

◎日は麗かに風も絶え、いつしか花は咲き出んど、心もどなき梢々、引き渡したる霞の中にも、梅は早や氣色はみ、ほゝぬみたるもよく見ぬぬ。(種彦)

◎此時六月の初めにて、砂石焼くが如く、池水煎るに似たり、されば赤日金を流し、青松人を宿し、渴するものは盗泉を擇ばず、息ふ

自 然 と 人

もの悪水を厭はず。(馬琴)



3. Sie lauft den Weg behende
von Anfang bis zu Ende,
erhält und wärmt die ganze Welt
aus ihrem himmlischen Gezelt.

4. Auf allen ihren Wegen
ist lanter Glück und Se
dann schlieszt sie freundlich ihre Bahn
und lächelt uns noch einmal an. —

5. Jezt geht sie klar und munter
am Abendhimmel unter;
bald aus des Morgenhimmels Thor
steigt sie mit neuem Glanz empor.

6. Drum waltet frohes Mutes
Wie sie, und thuet Gutes!
Dann schlieszt ihr fröhlich enern Lauf
und steht frohlockened wieder auf!



A SUMMER EVENING

How fine has the day been, how bright was the sun,
How lovely and joyful the course that he run,
Though he rose in a mist when his race be begun,

And there followed some droppings of rain!

But now the fair traveller's come to the west,
His rays are all gold, and his beauties are best;
He paints the sky gay as he sinks to his rest,

And foretells a bright rising again.

Just such is the christian; his course he begins,
Like the sun in a mist, when he mourns for his sins,
And melts into tears; then he breaks out and shines,

And travels his heavenly way:

But when he comes nearer to finish his race,
Like a fine setting sun, he looks richer in grace,
And gives a sure hope at the end of his days,

Of rising in brighter array.

Dr. Isaac Watts

DIE UNTERGEHENDE SONNE.

Friedrich Krummacher.

1. Wiegeht so klar und munter
die liebe Sonne unter!

Wie schaut sie uns so freundlich an
von ihrer hohen Himmelsbahn!

2. Das ist so ihre Weise.
Sie zeuget still und leise:
Wer flink am Tage Gutes thut,
dem ist am Abend wohl zu Mut.

月

只一衛星のみ、空氣なく水なく人なく木なく、寒冷寂寞なる一暗体なるのみ、しかも其半面一度太陽の光線を地球に反射するや、山を照し海に映じ、或は玲瓏玉の如く、或は悽愴利鎌の如し、古來幾多の英雄を泣かしめ、豪傑を笑はしむ幾多の詩人才子之が爲めに或は悲しみ或は樂しめり、其涙や其筆や如何に相映發せしよ。

◎望月のくまなきを千里の外までなかめたるよりも、曉ちかくなりて待ち出てたるがいと心ふかう青みたる様にてふかさ山の杉のこづゑに見ゆる、木の間の影うちしぐれたるむらぐもがくれの程又なくあはれなり、椎柴しらかしなどのぬれたるやうなる葉のうへにきらめきたるこそ、身にしみて心わらん友もがなど都こひしうおぼゆ

旅之友

れ。(徒然草)

◎月見る宵のいつとてももの哀れならぬをりはあき中に、こよひの新なる月の色には、げに猶わが世の外までこそよろづ思ひながさるれ。(源語)

◎其の夜は黒戸の濱といふ所にとまる、かたつ方は廣やかなる所の砂子はるくど白きに、松原しげりつゝ、月いみじうあかさに風の音もいみじう心ほそし。(更科)

◎大空に西に傾きたる月のかげ遠く澄みわたりて見ゆるに、霧わたりたる空のけしき、鐘の音鳥の聲ひとつに響きあひて、更に過ぎにし方、今行く末の事なぞもかゝる折はあらじと袖の色さへあはれにめづらかなり。(和泉式部)

自然と人

旅 之 友

◎しはすの月夜なれど、宮の中は皆白妙に見ゆわたりて、木々の梢は花と見ゆ、池の鏡もされたるに、枯蘆のはかなく萎れふしたるほど、萬に見所あり、音なく静りたるに、絶えなく岩にもるゝ水の音はかりして、軒端の松のみぞつれなく見ゆる。(中務日記)

◎月いみじうかすみおもしろきに、花はひとつに匂ひたる夜のけしきたぐひなきにも、住みなれし夜の空のかうぞあらむかしとこよひの月を見つゝ思ひ出てたまふ人もあらむ。(濱松中納言物語)

◎月ねほろにさしいで、池ひろく山こぶかさわたり、心ほそげにみゆるにも、すみはなれたらむ岩はのなか、おぼしやらる。(源語)

◎蔽ひかゝりし叢雲の、絶間くくに明るくなり、また闇くなり朦朧と、膏油盡きたる燈火の消ゆなんとするに彷彿たり。(春水)

自 然 と 人

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

我身一つはもとの身にして

業 平

てりもせず曇りもはてぬ春の夜の

朧つくよにしく物ぞなき

千 里

霞む夜は書しまが磯の浪の上に

映すともなき月の影哉

契 中

天の川水まさるらし夏の夜は

流るゝ月の淀むまもなし

讀 人 不 知

庭の面はまた乾かぬに夕立の

空さうけなく澄める月かな

頼 政

湧きかへる岩井の水を氷にも

結びかへたる月のすししき

千 浪

白雲に羽打ちかはしとふ所の

かすさへみゆる秋の夜の月

讀 人 不 知

秋のよのとりあつめたる哀れさを

問ふにも似たる月の影かな

千 蔭

鹿の聲きぬたの音も爽にて

月は縣のものにそありける

直 好

枯野行く道の一筋はるくと

みわたも寒き冬の夜の月

有 功

つくくと今年も眺め果にけり

哀れと思へ冬の夜の月

景 樹

杏花飛簾散餘春。明月入戶尋幽人。寒衣步月踏花影。爛如流水涵青
蘋。花間置酒清香發。爭挽長條落香雪。山城薄酒不堪飲。勸君且吸杯
中月。洞簫聲斷月明中。惟憂月落酒盃空。明朝卷地春風惡。但見綠
葉栖殘紅。

蘇子瞻

旅之友

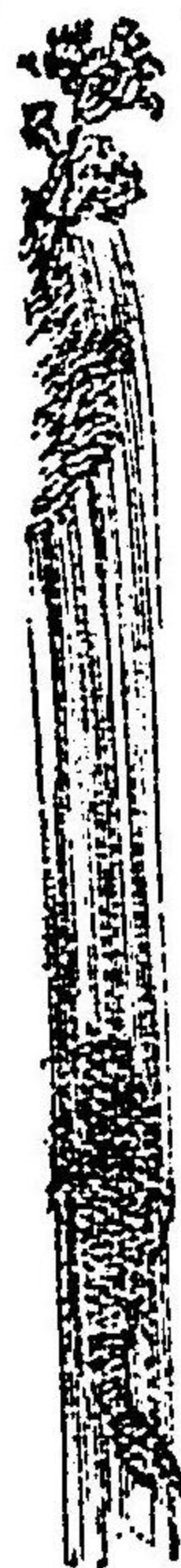
青天有月來幾時。我今停盃一問之。人攀明月不可得。月行却與人相
隨。皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝發。但見宵從海上來。寧知曉向
雲間沒。白兔搗藥秋復春。姮娥孤栖與誰鄰。今人不見古時月。今月
曾經照古人。古人今人若流水。共看明月皆如此。惟願當歌對酒時。
月光長照金樽裏。

李太白

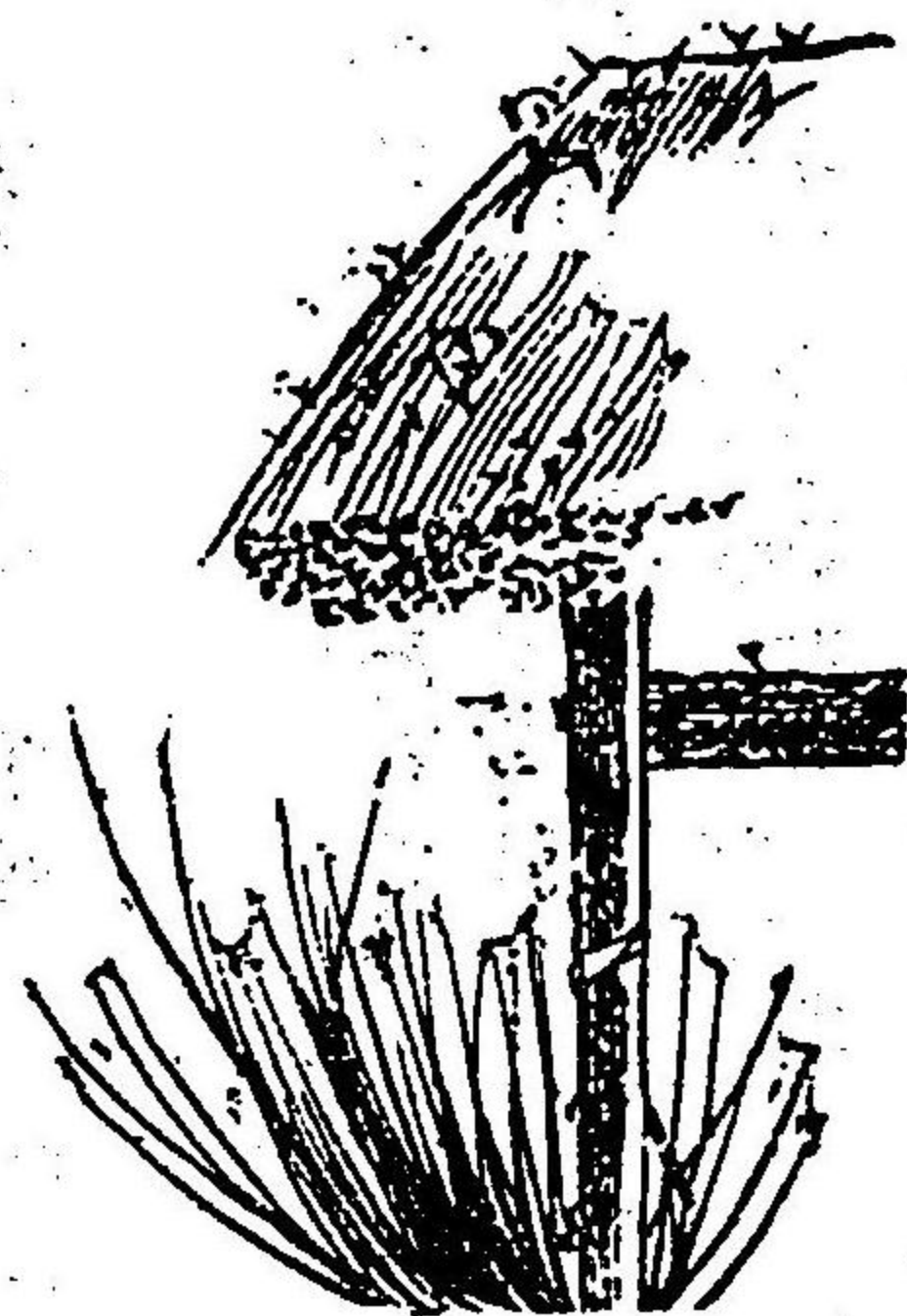
自然與人

雲と水とちらにゐるや今日の月
月涼し心止むれば川の音
松の月枝にかけたりはづしたり
峠まで視かへて月見かな

東里 暉雲 來山 任地



lehr und feierlich einher,
Menschentröster, Gottesbote,
der auf Friedenswolken thront, —
Zu dem schönsten Morgenrote
führst du uns, o guter Mond!



TO THE MOON

Art thou pale for we anriness
Of climbing heaven, and gazing on the earth,
Wandering companionless
Among the stars that have a different birth, —
And even-changing, like a joyless eye
That finds no object worth its constancy?
P. B. Shelley.

AN DEN MOND.

Karl Enslin.

1. Guter Mond, du gehst as stille
dursh die Abendwolken hin;
deines Schöpfers weiser Wille
hiess auf jener Bahn dich Ziehn.
Leuchte freundlich jedem Müden
in das stille Kämmerlein!
Und dein Schimmer giesse Frieden
ins bedrängte Herz hinein!
2. Guter Mond, du wandelst leise
an dem blaven Himmelzelt,
Wo dich Gott zu seinem Preise
hat als Leuchte hingestellt.
Blicke traulich zu uns nieder
durch die Nacht aufs Erdenrund!
Als ein truer Menschenhüter
Thust du Gottes Liebe kund!
3. Guter Mond, so sanft und milde
glänzt du im Sterneumeer,
wallest in dem Lichtgefilde

曉

日輪未だ地平線上に上らずして、萬戸夢漸く冷やかに、天地明暗の間に入り、山も川も森も林も、寂として眠未だ醒めず、夜の神は將に此の世界を太陽に譲りて西に去らむとす、嗚呼この瞬間、如何に自然らしきよ。

◎曉かけていづる月かけ、ほのかにかすみわたるて、よも山べ心ほそげに見わたされたるに、ちかき寺々のかねの聲々もさこえつゝ、いづくによむにか、經の聲もほのかにさこゆなり。(狭衣)

◎常よりもやがてまどろますあかじ給へるあしたに、霧のまがさよ、り花の色々れもしろく見わたる中に、朝顔のはかなげにてまじりたるを、猶ことにめとまるゝ心地し給ふ。(源語)

旅之友

自然と人

◎半は天明ならんとして半は未だ明かならず、花影残月を止めては、紅錦に明鏡を包めるが如く、曉星稀にして數あるは暗夜に螢光を見るに似たり、蝶宿りて花粉を止め、鶯眠りて柳金を借る、紫だちし横雲に、三つ四つ二つ明鳥の飛びゆくは、清女が筆すさみを思ひ出て、鶏鳴て曉光寒きは、岑參が詩もかゝる光景や作りしならんと思はるるに眺むる。(種彦)

初瀬山花に明けゆく鐘の音は

法のものともさこゆさりけり

千浪

明ながらいまた轉る鳥の音も

聞ぬぬやまのかけ静なり

花さかは猶いかならん芳野山

霞める空のはるの明ほの

讀人不知

羈 旅

人もし胸中一片の憂を抱いて旅せんか、見るもの、聞くもの、觸るもの、悉く涙ならぬはなく、一片の喜を有して旅せんか、見るもの、聞くもの、觸るもの、悉く樂の種あらざるなし、山や、雲や、鳥や、風や、彼等は只無心のみ、しかも人これを見、これ聞き、これに觸れて、或は悲しみ、或は喜ぶ、山や、雲や、汝抑も人をして喜ばしむる機能を有するか、鳥や、風や、汝抑も人をして悲

自 然 と 人

しましむる動機ありや。

◎相坂山をうち趣いて、勢多の唐橋駒もどいろと踏み鳴らし、雲雀上れる野路の里、志賀の浦浪春かけて、霞にくもる鏡山、比良の高峯を北にして、伊吹の岳も近きぬ。心をとむとしなければ、荒れてなかくやさしさは、不破の關屋の板廂、いかに鳴海の汐干瀉、涙に袖はしはれつゝ、かの在原の何某の、唐衣きつゝ馴れにしと詠めけん、三河の國の入橋にもなりぬれば、蜘蛛手にもをとあはれなり。濱名の橋を渡り給へば、松の梢に風さびて、入江にさわく波の音、さらでも旅は物憂さに、心をつくす夕まぐれ、池田の宿にも着き給ひぬ。(平語)

◎小夜の中山にかゝり給ふにも、又越ゆべしとも覺ぬれば、いと

哀の數をひて、袂ぞいたくぬれまさる。うつゝの山邊の鷲の道、心細くも打ちこゑて、手ごしを過ぎて行けば、北に遠さかりて、雪白き山あり、問へば甲斐の白峯といふ。その時三位の中將、落つる涙をぬさへつゝ、

惜しからぬ命なれども今日までに

つれなきかひの白ぬをも見つ

清見が關打ち越ゑて、富士の裾野になりぬれば北には青山峩々として、松吹く風颯々たり。南には蒼海漫漫々として、岸打つ浪も芒々たり。戀せば瘦せぬべし、戀せずもありけりど、明神の謠ひ始め給ひけん、足柄の山打ちこゑて、こゆるぎの森、鞠子川、小磯、大磯の浦々、やつまど、とがみが原、見こしか崎をも打ちすぎで、急がぬ

旅 之 友

旅とはおもへども、日數やうく重れば、鎌倉へこそ入り給へ。

(全上)

◎落花の雪にふみ迷ふ、片野の春の櫻狩り、紅葉の錦きてかへる、嵐の山の秋のくれ、一夜をわかすほどだにも、旅ねとなればものうきに、恩愛の契り淺からぬ、我が古郷の妻子をば、ゆくえも知らぬおもひおき、年久しくも住なれし、九重の都をば、今を限りと顧みて、思はぬたびにいで給ふ、心の中ぞ哀れなる、憂をばとめぬ相坂の、關の清水に袖ぬれて、未は山路をうちでの濱、沖を遙かに見渡せば塩ならぬ海にこがれゆく、身は浮船のうさしづみ、駒もといろと踏みならず、瀬田の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や、世をうねの野になく鶴も、子を思ふかと哀れなり、時雨もいたく森山の、木の

自 然 と 人

旅 之 友

下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、笹分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとて、涙に曇りて見ぬわかず、物を思へば夜の間にも、おひその森の下草に、駒を駐めてかへりみる、古郷を雲や隔つらん、番馬、醒ヶ井、柏原、不破の關屋はあれ果てし、猶もるものは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、盪干に今や鳴海潟、傾く月に道見ぬて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀れと夕暮の、いりあひなれば今はとて、池田の宿に着き玉ふ、元暦元年の比かどよ、重衡中將の、東夷のために囚はれて、この宿につき玉ひしに

東路の丹生の小屋のいぶせきに

故郷いかに戀しかるらん

と、長者の女が詠みたりし、其の古の哀れまで、思ひ残さぬ涙なり、旅館の燈火幽かにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶きて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越を行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔し西行法師が、命なりけりと詠じつゝ、二度こえし跡までも、浦山しくぞ思はれける、隙行く駒の足はやみ、日己に亭午に昇れば、餉まるらする程とて、輿を庭前におろし、轅を叩いて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ玉ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に依りて、光親卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられし時、昔南陽縣菊水。汲下流而延齡。今東海道菊河。宿西岸而終命。と書

自 然 と 人

きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀れやいどい
増りけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書れける、
古もかゝるためしを菊川の

同じ流れよ身をや沈めん

大井河を過ぎ玉へば、都にありし名をさして、龜山殿の行幸の嵐の
山の花盛り、龍頭鷁首の舟にのり、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今
は二度見ぬ世の夢と、成りぬと思ひつゞけ玉ふ、島田藤枝に懸りて
岡邊の眞葛裏枯れて、物かなしき暮夕に、宇都の山邊をこえ行けば、
蕪楓いと茂りて道もなし、昔業平の中將の住所を求むとて、東の方
に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけりど、詠みたりしも、かくや
と思ひ知られたり、清見潟を過ぎ玉へば、都に歸る夢をさへ、通さ

旅之友

自 然 と 人

ぬ波の關守に、いと涙を催はされ、向ひはいづこ三穂が崎、興津
蒲原うち過ぎて、富士の高峯を見玉へば、雪の中より立つ煙、上な
き思ひに比べつゝ、明る霞に松みわて、浮島が原を過ぎ行けば、盪
干や淺き船うさて、れりたつ田子の自も、浮世を遶る車返し、竹の
下道行きあやむ、足柄山の嶺より、大磯小磯直下して、袖にも波は
小綾の、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の
暮れ程に、鎌倉にこそつきたまひけれ。(大平記)

◎野を過ぎ山をうちこねて、露に宿り風に梳り、なれも習はぬ草枕、
旅寢の憂を身にぞ知る、草鞋に足を破られては、秋ならぬ路の邊の
草の葉を血しほに染め、孤村に宿りを求めかねては、夏の霄の月光
に送られてなほ行くめり。(馬琴)

旅之友

○時は季冬にして朔風膚を犯し陰雲雪をはらみて寒氣堪へかたし、笠は山に似て戴けども、富士を見るによしなく、杖は足高をたすけて、前めども裾野に遠し、都の方は如何はかり、遠江と行きくつて三河とさけば武士の、矢矧の橋もありながら、鳴の音羽も敵かど駭き、虎の尾張も踏みこめて、竹の都路程ちかみ、嘯かでおこる神風の、伊勢の驛路の鈴鹿山、風に櫛り雨に沐ひ、一條の客路萬里の山河、見る所悉く魂を傷ましめ、聞くところすべて腸を断しむ。(馬琴)

○再び東路に赴きしが、憂は死するにいや増して、裾は露袖は涙に萎れつゝ、雨を帯びるた曲浦の柳夕を送る遠寺の鐘も、哀れを催す旅寢には、青絲の髮疎にして、何時の間に老は來ぬらんと怪まれ、紅

自 然 と 人

玉の膚消えては尙つれなき命を恨み、日數積りて信濃路や、岐祖の棧程近き、寢覺の里にたどり着きぬ、元より此の地は夏寒く春立ち歸れば花もなく、秋の初にもみぢして、冬をも待たず深雪ふる、隆寒不毛の國なれば、連山奇峯嵯峨と聳ゆ、一步は高く、一步は低く雲をよぢ霧を分け、行く路を失へば。(全上)

○時は彌生の初めにて、山は翠に色々の、花綻びて露深く、水は皎ふして種々の鳥囀りて、風暖く行人は馬上に睡り、農夫は畝に憩ひ家には種を浸し門には桑を摘む、人の心の長閑けくて旅面白き比なれども。(全上)

○素より急ぐ途次にあらねば、彌生の末の晚櫻、霞込めたる野に山に、越ゆる心も長閑けくて、袂ぬるとき春風に、千々の若草色添ゆ

て、身さへ足さへ、軽々と、蹈み心よき道芝に、消えて又立つ陽炎の、それかあらぬか烟り吹く、くわへ烟管の烟草さへ、旅の疲勞を忘れ草、そのみちくさに日も闇けて、稍夕暮に近き比、品川村に遠からぬ、矢口の渡の河原に來にけり。(春水)

命なりけりさよの中山

西行

都にて月をあはれと思ひしは

敷にもあらぬすさひなりけり

全

都をは霞と共に立ちしかど

秋風を吹くしら川の關

能 因

都いでし今日みかの原いづみ川

川風さむし衣かせ山

讀 人 不 知

風景

團々たる坤儀の上、山あり河あり、海あり野あり、浮々たる雲、
颯々たる風、悠々として水に浮ぶ魚あれば、嚙々として樹間に囀る
鳥あり、遂に森羅萬象を形ちづくりて、造化の美妙其間に隠る、次
にあくるものは實に其真相を寫せしもの。

◎はる／＼と霞みわたれるらに、ちる櫻あれば今ひらけをむる赤
ど、いろ／＼見渡さるゝに、河をひ柳のおさふしなびくみづかげな
ど、おろかならずをかしきを、見ならひ給はぬ人は、いとめづらし
くみすてがたしとおぼす。(源語)

◎南表なる所伊豫簾かけ渡し、あたり／＼いとさはらかにしつらひ
たるいと涼しげなるに、夕風待ちとるべき端つ方についゐたるに、

ADMONITION TO A TRAVELLER

Yes, there is holy pleasure in thine eye!
- The lovely cottage in the garden oak
Hath stirr'd thee deeply; with its own dear brook,
Its own small pasture, almost its own sky!

But covet not the abode - O do not sigh
As many do, repining while they look;
Intruders who would tear from Nature's book
This precious leaf with harsh impiety:

- Think what the home would be if it were thine,
Even thine, though few thy wants! - Roof, window door,
The very flowers are sacred to the Poor,
The roses to the porch which they entwine:
Yea, all that now enchants thee, from the day
On which it should be touch'd would melt away!
W. Wordsworth.



旅之友

かつが暑さも忘るゝ心地して、簀子のはしに出で見出せば、庭の
 稍ども何れとなく繁りあひたるものから、木立うとましからぬ程に
 繕ひなして、此面彼面にはかなき柴垣なつかしく結ひ渡せしなど、
 しめやかに見所あるやうなり、夕つけゆく程、軒近く吳竹の下風心
 もどなきほどに打ち戦めきたるも、あかぬ心地のみぞせらゝ。(木居
 宣長)

◎道すがらも四方の梢の色々なるを御覽じ過ぎさせ給ふ程に、山
 陰なればにや日もやうく暮れかゝりぬ、野寺の鐘の入相の聲すこ
 く、分くる草葉の露しけみ、いどい御袖ぬれまさり、嵐烈しく木の
 葉みたりがはし、空掻きくもりいつしか打ちしぐれつゝ、鹿の音が
 すかに音づれて、虫の怨も絶ゆるなり。(平語)

自然と人

◎もし夜静なれば窓の月に古人を忍び、猿の聲に袖をうるほす、叢
 の螢は遠く真木島の篝火にまがひ、曉の雨はれのづから木の葉吹く
 風に似たり、山鳥のほろくど鳴くを聞きても父か母かと疑ひ、峯
 のかせぎの近く馴れたるにつけても世にとほさかる程を知る、或は
 埋火をかきおこして老の寐覺の友とす、おそろしき山ならぬと、梟
 の聲をわはれむにつけても、山中の景色折につけてつくることな
 し、況や深く思ひ深く知られん人のためには、これにしも限るべか
 らず。(方丈記)

◎野山のけしきは、深くみ知らぬ人だにたゞにやはおほゆる、山風
 に堪へぬ木々の梢も峯のくすはも心あわたいしう争て散るまぎれ
 に、尊き讀經の聲かすかに、念佛聲などの聲はかりして人のけはひ

いと少なう、木からしの吹き拂ひたるに、鹿はたゞまがきの下に佇みつゝ、山田のひたにも驚かす、色なき稻どもの中に交りてうちあくるも愛ひ顔なり。(源語)

◎頃はしはすの末つかた、梢の木葉落盡して松柏の操を見はし、山川の流水半は涸れて、石の背も渡るに堪へたり、山は雪の上に雪を積みてつゝらをりなる路絶ゆべく、萱の軒に萱を藏めてたき火の儲ゆたかあり、寒風肌を冒しては遠きぬたの音も耳に留り、群尸水田に氷を摧くときは近邨の堤も目に遙けし、一橋渡り果て、又一橋あり、一程行き盡して又一程長し。(馬琴)

◎只見る黄葉連山を装ひ、秋色乾坤に満ち、水織々として谷滑かに風颯々として松冷やかなり、石は羅を帯て赤く、峯は雲を吐て白し、

牧童小牛を牽て登り、樵夫薪を負て歸る。(全上)

◎見上ぐれば幾群の秋鳥雲に入て還らず、見下せば千頃の稻田花を含て戦ぐのみ、露は道芝に玉を磨き、菊は藪蔭に金を欺く、人音に駭き飛ぶ虫は星を見て鳴かんと欲し、案山子に狎れてかよふ鹿は圃を暴して戯ねざるべし。(全上)

◎月明かに星稀にて、風いと寒く霜深かり、氷を摧く水鳥の、立つかた遠く見上ぐれば、西は赤阪青山に、降り置く霜の眞白なる、目黒に落つる雁かねも、黄ばみ朽ちたる藁塚を、いふせくや思ふ夜目ながら、五色もよしやよもつそら、南は麻布高巖芝浦近く寄る波も、東へ續く入江瀉、北は芝崎神田の岱、漁村樵徑をしらひて、目に見ゆるあり見ぬあり、征客常に腸を断つべかりけるあかめな

旅 之 友

り。(全上)

◎よよと鳴く音に磯那鳥、友まどはしくむらくと、寄せてはかへす沖津波の、鼓に合する松の琴、遠寺の鐘も音添えて、諸行無常と告げ渡る、長汀曲浦の旅のそら、心を碎く習なるに、比しも秋は名残にて、夜も長月の影寒さ、玉兔は西へ波をわきて、いる弓張の迹に行く、雁の羽風に降る霜も、東も白くありにけり (全上)

◎落日烟を帯て碧霧を生じ、彩雲水にかゝりやきて紅の色を散らし、釣する翁は舟を移して家路を急ぎ、群れ居る鷺は友を集めて莎汀に下り、蘆花の雪をふらす濱風は苔深き軒端をめぐり、赤崎蛤の紅葉を散らす枯枝に、ふくれ聲なる山鳩も時に歸りてはや黄昏の時となれば。(京傳)

自 然 と 人

霞しく春の沙路をみわたせば

緑をわくる沖つしらなみ

讀 人 不 知

心なき身にも哀れはしられけり

しき立澤の秋の夕暮

西 行

津の國のなにはの春は夢なれや

あしのかれ葉に風渡るなり

全

から衣うつこえさげは月清み

またねぬ人を空にこそしれ

貫 之

庭の面は月漏れぬ迄なりにけり

梢に夏のかげしげりつゝ

讀 人 不 知

港江の氷にたてるあしの葉に

ゆふ霜さやき浦風ぞふく

讀 人 不 知

爰もをし彼所も床し行きとまり

思ひ定めぬ春の野へかな

成 章

粟田山ふもとの粟生色さつて

薄霧なびき秋かせそ吹く

蘆 庵

の分せし縣の宿は荒れにけり

月みにこよと誰につけまし

眞 淵

はるくとかすむよそめに見渡せば

たゞ一筆の住吉の松

千 浪

あしの海の水の白波ふきよせて

氷をたゞむ夕あらし哉

久 胤

うすらひの下行く魚のすきかけに

物思ひしてたてる驚かな

千浪

我庵は松原つゞき海近く

富士の高根を軒端にぞみる

道灌

旅之友

四季

春は曙、やうく白くなりゆく。山際すこしわかりて。紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜、月のころはさらなり。闇もなほ螢とびちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕暮、夕日はな

自然と人

やかにさして、山際いと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなぞ飛びゆくさえあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆる、いとをかし。日入りはてし、風のねと蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒さ、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつぎ／＼し。晝にありて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃火桶の火と、白き灰がちなりぬるはわろし。

清少納言

をりふしのうつりかわり

をりふしのうつりかはるこそ、物おとにあはれなれ。ものゝあは

百八
 れは、秋こそまされど、人ごとにいふめれど、それもさる物にて、
 今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥のこゑ
 赤ども、ことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、かさねの草
 もえいつる比より、やゝ春ふかくかすみわたりて、花もやうくけ
 しさだつほどこそあれ。をりしも雨風うちつゞきて、心あわたし
 くちり過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたい心をもみぞなや
 ます。花たちはなほ、名にこそおへれ、猶梅のにはひにぞ、いにし
 への事も立ちかへり、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹のきよげに、
 藤のをぼつかなきさましたる、すべて思ひすてがたきこと多し。灌
 佛の比、まつりの比、若葉のこすぬすしげに、しげりゆくほどこ
 そ、世のあはれも、人の戀しさもまされど、人の仰せられしこそ、

げにさる物なれ、五月あやめふく比、早苗とる比、くひなのたゞく
 など、心ほそからぬかは。六月の比、あやしき家に、夕がほのしろ
 く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月ばらへ又をかし。棚
 機まつるこそ、なまめかしけれ。やうく夜さむになるほと、かり
 なきてくる比、はぎの下葉色づくほと、わさ田かりほすなど、とり
 あつめたることは、秋のみぞれほかる。又野分のあしたこそをかし
 けれ。いひのゆくれば、みな源氏物語、枕草紙などに、ことふりに
 たれど、同じこと、又いまさらに、いはじにもあらず。おぼしき
 こといはぬは、はらふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢさ
 なきすさびにて、かいやりすべき物なれば、人の見るべきにもあら
 ず。さて冬がれのけしきこそ、秋にはをさくたとるまじけれ。み

百十
ぎはの草に、もみぢのちりどいまりて、霜いとしろうれける夢した、
やり水より、けふりのたつこそをかしけれ。年のくれはてし、人ど
どにいそぎあへる比ぞ、又なくあはれなる。すさまじき物にして、
見る人もなき月の、さむけくすめる、廿日あまりの空こそ、心細き
物あり。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公
事どもしげく、春のいそぎに取りかさねて、もよほしおこなはるゝ
さまぞいみじきや。追難より、四方拜につづくこそおもしろけれ。
つごもりの夜、いたうくらさに、松どもどもして、夜半すぐるまで
人の門たゝき、はしりありきて、何ことにかあらん、ことごとくしく
の、しりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがにねとなくな
りぬるこそ、年のなごりも心ばをけれ。なき人のくる夜とて、魂ま

つるわさは、此比都にはなきを、あづまのかたには、猶すること
てありしこそあはれなりしか。かくて明けゆくそらのけしき、昨日
にかはりたりとは見ぬねど、引きかへめづらしき心ちぞする。大路
のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれ
なれ。

兼好法師

Some lightly o'er the current skin,
Some show their gaily-gilded trim
Quick-glancing to the sun.

To Contemplation's sober eye
Such is the race of Man:
And they that creep, and they that fly
Shall end where they began.

Alike the busy and the gay
But flutter thro' life's little day,
In Fortune's varying colours drest:
Brush'd by the hand of rough Mischance
Or chill'd by Age, their airy dance
They leave, in dust to rest.

Meshinks I hear in accents low
The sportive kind reply:
Poor moralist! and what art thou?
A Solitary fly!

Thy joys no glittering female meets,
No hive hast thou of hoarded sweets,
No painted plumage to display:
On hasty wings thy youth is flown;
Thy sum is set, thy spring is gone—
We frolic while 'tis May.

T. Gray.

A SUMMER SCENE

Low walks the sun, and broadens by degrees,
Just o'er the verge of day. The shifting clouds
Assembled gay, a richly gorgeous train,

ODE ON THE SPRING

where she rosy-bosom'd Hours
Fair Venus' train, appear,
Disclose the long-expecting flowers
And wake the purple year!
The Attic warbler pours her throat
Responsive to the cuckoo's note,
The untaught harmony of Spring:
While, whispering pleasure as they fly,
Cool Zephyrs through the clear blue sky
Their gather'd fragrance fling.

Where'er the oak's thick branches stretch
A broader, browner shade,
Where'er the rude and moss-grown peach
O'er-canopies the glade,
Beside some water's rushy brink
With me the Muse shall sit, and think
(At ease reclined in rustic state)
How vain the ordour of the crowd,
How low, how little are the Proud,
How indigent the Great!

Still is the toiling hand of Care;
The panting herds repose:
Yet hark, how thro' the peopled air
The busy murmur glows!
The insect youth, are on the wing,
Eager to taste the honied spring
And float amid the liquid noon:

Of cordial glances, and obliging deeds.
 Onward they pass o'er many a panting height,
 And valley sunk, and unfrequented; where
 At fall of eve the fairy people throng,
 In various game and revelry, to pass
 The summer night, as village stories tell.
 But far about they wander from the grave
 Of him whom his ungentle fortune urged
 Against his own sad breast to lift the hand
 Of impious violence. The lonely tower
 Is also shunned; whose mournful chambers hold—
 So night-struck fancy dreams—the yelling ghost.

Among the crooked lanes, on every hedge
 The glowworm lights his gem, and through the dark
 A moving radiance twinkles. Evening yields
 The world to night; not in her winter robe
 Of massy Stygian woof, but loose arrayed
 In mantle dum. A faint-erroneous ray,
 Glanced from the imperfect surfaces of things,
 Flings half an image on the straining eye;
 While wavering woods, and village, and streams,
 And rocks, and mountain-tops, that long retired
 The ascending gleam, are all one swimming scene,
 Uncertain if beheld. Sudden to heaven
 Thence weary vision turns; where, leading soft
 The silent hours of love, with purest ray
 Sweet Venus shines; and from her genial rise,
 When daylight sickens still it springs afresh,
 Unrivalled reigns, the fairest lamp of night.

Thomson.

In all their pomp attend his setting throne.
 Air, earth, and ocean smile immense. And now,
 As if his weary chariot sought the bowers
 Of Amphitrite, and her tending nymphs
 (so Grecian fable sung), he dips his orb;
 Now half immersed; and now a golden curve
 Gives one bright glance, then total disappears.
 Confessed from yonder slow-extinguished clouds,
 All ether softening, sober evening takes
 Her wonted station in the middle air;
 A thousand shadows at her beck. First this
 She sends on earth; then that of deeper dye
 Steals soft behind; and then a deeper still,
 In circle following circle, gathers round,
 To close the face of things—A fresher gale
 Begins to wave the wood, and stir the stream
 Sweeping with shadowy gust the fields of corn;
 While the quail clamors for his running wate.
 Wide o'er the thirtly lawn, as swells the breeze,
 A whitening shower of vegetable down
 Amusive floats. The kind impartial care
 Of nature nought disdains: thoughtful to feed
 Her lowest sons, and clothe the coming year,
 From field to field the feathered seeds she wings.

His folded flock secure, the shepherd home
 Flies merry-hearted; and by turns relieves
 The ruddy milkmaid of her brimming pail;
 The beauty whom perhaps his witless heart—
 Unknowing what the joy-mixed anguish means—
 Sincerely loves, by that best language shown.

Or sinking as the light wind lives or dies;
And full-grown lambs loud bleat from hilly bourn
Hedge—crickets sing, and now with treble soft
The redbreast whistles from a garden-croft,
And gathering swallows twitter in the skies.

F. Keats

A WINTER SCENE.

Through the hushed air the whitening shower descends
At first thin-wavering, till at last the flakes
Fall broad and wide and fast, dimming the day
With a continual flow. The cherished fields
Put on their winter roke of purest white:
Tis brigtness all, save where the new snow melts
Along the mazy current. Low the woods
Bow their hoar head: and ere the languid sun,
Faint from the west, emits his evening ray;
Earth's universal face, deep hid, and chill,
Is one wide dazzling waste, that buries wide
The works of man. Drooping, the laborer—ox
Stands covered o'er with snow, and then demands
The fruit of all his toil. The fowls of heaven,
Tamed by the cruel season, crowd around
The winnowing store, and claim the little boon
Which Providence assigns them. One alone,
The red-breast, sacred to the household gods,
Wisely regardful of the embroiling sky,
In joyless fields and thorny thickets, leaves
His shivering mates, and pays to trusted man
His annual visit. Half afraid, he first
Against the window beats; then, brisk, alights

ODE TO AUTUMN.

Season of mists and mellow fruitfulness!
Close bosom—friend of the maturing sun;
Conspiring with him how to load and bless
With fruit the vines that round the thatch—eaves run;
To bend with apples the moss'd cottage—trees,
'And fill all fruit with ripeness to the core;
To swell the gourd, and plump the hazel shells
With a sweet kerned; to set budding more
And still more, later flowers for the bees,
Until they think warm days will never cease;
For Summer has o'erbrimm'd their clammy cells.

Who hath not seen Thee oft—amid thy store?
Sometimes whoever seeks abroad may find
Thee sitting careless on a granary floor,
Thy hair soft—lifted by the winnowing wind;
Or on a half-reap'd furrow sound asleep,
Drowsed with the fume of poppies, while thy hook
Sparest the next swarth and all its twined flowers;
And sometime like a gleaner thou dost keep
Steady thy laden head across a brook;
Or by a cider-press, with patient look,
Thou watchest the last oozings, hours by hours.
Where are the songs of Spring? Ay, where are they?
Think not of them,—thou hast thy music too,
While barrid clouds bloom the soft-dying day
And touch the stubble—plains with rosy hue;
Then in a wailful choir the small gnats mourn
Among the river—sallows, borne aloft

Far from the track and blest abode of man;
 While round him night resistless closes fast,
 And every tempest howling o'er his head
 Renders the savage wilderness more wild.
 Then throng the busy shapes into his mind,
 Of covered pits, unfathomably deep,
 A dire descent! beyond the power of frost;
 Of faithless bogs! of precipices huge
 Smoothed up with snow; and what is land unknown
 What water of the still unfrozen spring,
 In the loose marsh or solitary lake,
 Where the fresh fountain from the bottom boils,
 These check his fearful steps, and down he sinks
 Beneath the shelter of the shapeless drift,
 Thinking o'er all the bitterness of death,
 Mixed with the tender anguish nature shoot
 Through the wrung bosom of the dying man,
 His wife, his children, and his friends, unseen
 In vain for him the officious wife prepares
 The fire fair blazing, and the vestment harm:
 In vain his little children peeping out
 Into the mingling storm, demand their sire
 With tears of artless innocence. Alas!
 Nor wife nor children more shall he behold,
 Nor friends, nor sacred home. On every nerve
 The deadly winter seizes, shuts up sense,
 And o'er his inmost vitals creeping cold,
 Lays him along the snows a stiffened corse,
 Stretched out, and bleaching on the northern blast.

Thomson.

On the warm hearth; then hopping o'er the floor,
 Eyes all the smiling family askance,
 And pecks, and starts, and wonders where he is:
 Till more familiar grown, the table crumbs
 Attract his slender feet. The foodless wilds
 Pour forth their brown inhabitants. The hare,
 Though timorous of heart, and hard beset
 By death in various forms, dark snares and dog
 And more unpitying men, the garden seeks,
 Urged on by fearless want. The bleating kine
 Eye the bleak heaven, and next, the glistening earth,
 With looks of dumb despair; then, sad dispersed,
 Dig for the withered herb through heaps of snow,

As thus the snows arise, and foul and fierce
 All winter drives along the darkened air,
 In his own loose revolving fields the swain
 Disastered stands; sees other hills ascend,
 Of unknown joyless brow, and other scenes,
 Of horrid prospect, shag the trackless plain;
 Nor finds the river nor the forest, hid
 Beneath the formless wild; but wanders on
 From hill to dale, still more and more astray,
 Impatient flouncing through the drifted heaps,
 Stung with the thoughts of home; the thoughts of home
 Rush on his nerves, and call their vigor forth
 In many a vain attempt. How sinks his soul!
 What black despair, what horror, fills his heart!
 When for the dusky spot which fancy feigned
 His tufted cottage rising through the snow,
 He meets the roughness of the middle waste,

友 之 旅

OKTOBER.

Adolf Böttger

1. Der Junker Herbst im Jagdgewand,
den blanken Eschenspeer zur Hand,
zieht durch Gebirg und Felder,
der Pfeil zuckt von der Senne schnell,
bei Hussaruf und Hundsgebell
durchkeucht der Hirsch die Wäldor.
2. Wild durch der Eichen alten Forst
zum adlerhouen Felsenhorst
Schwingt er behead die Glieder,
hält Rast dann auf dem moos'gen Block,
schlingt Weinlaub in des Hoars Gelock
und blickt ins Thal hernieder.
3. Uud wo ins Thal sein Auge schaut,
erglänzen Früchte sanftbelaut,
schwillt blau am Stock die Traube,
und wie er spricht ein einzig Wort,
flieg rasch das Grün dats Blätter fort,
und Scharlach hängt am Laube.
4. Schlau lächelnd stösster dann ins Horn
und stürmt auf; neu durch Busch und Dorn
Vom seinen Ruf dahergebraust
kommt Sturm, der Jagdesell, uud saust
das Laub von zweig und Wipfel.

明治三十二年六月二十日印刷
明治三十二年六月廿四日發行

旅之友與付

〔定價金拾五錢〕

發行兼編輯者

高橋茂三郎

東京市麴町區富士見町
五丁目二十二番地

印刷者

大野喜六

東京市麴町區飯田町
四丁目三十一番地

印刷所

成功堂

東京市麴町區飯田町
四丁目三十一番地

發行所

中學書院

東京市麴町區富士見町
五丁目二十二番地

版權
所有

5/36
 所捌賣大籍書行發院書學中

東京神田區表神保町六番地

東京堂

同 神田區裏神保町一番地

上田屋

同 京橋區尾張町二丁目二十六番地

東海合資會社

同 京橋區錦屋町十四番地

合資北隆館

同 神田一ツ橋通町七番地

有斐閣

同 日本橋區通三丁目六番地

林平次郎

同 神田區鍛冶町四番地

誠之堂書店

東京神田區表神保町一番地

敬業社

同 神田區雜子町三十二番地

岡崎屋

同 神田區表神保町二番地

中西屋

同 本郷區元富士町二六番

盛春堂

同 所

田中屋

同 牛込區神樂町三丁目六番地

盛文堂

大阪東區備後町四丁目七十八番屋敷

大曾捌所 吉岡平助

材料豐富、記事の有益、紙質の佳良、印刷の鮮明等は本社の癡に誇る所なり。本誌は徒に世の通常雑誌の如く諸君の娛樂にのみ供するを好まず、清逸の情操を養ひ高雅の趣味を興へんことを務む。半は雜誌体にして、半は隨筆体、されば其記述は一讀直に抛擲するの類にあらずして、永遠保存すべき價値の事項を列載せり。毎年未だ以て書登結了し、之を分本せば(一)本領、文學、(二)英文、(三)數學理科、地理歴史、遊學案内、(四)雑誌、雜報、(五)群芳、(六)附録の六冊に區別して、各部完全の書籍に綴ることを得べし。以上本誌の特色なり

中學新誌第三年第四號目次

- 寫真銅版、足利直義の筆蹟
 [本領] 朋友 東京府尋常中學校教諭 征倉新治
 [文學] 吉野拾遺評釋 東宮侍闈 本居豐顯
 演名の橋 第二高等學校教授、文學士 重田定一
 借物の辨(鶴衣) 小栗風雲
 禊是なし(小説) 村上天外
 春、景(文語粹金) 理科大學 X 村 Y 孝 Z
 [教學理科] 盧駁小言 理科大學 X 村 Y 孝 Z
 [地理歴史] ヒ、ト、評釋 法科大學 中 村 Y 孝 Z

- 西洋立志美談 文科大學 E
 小山田高家と上山六郎左衛門 學習院講師 島野幸次 S
 [讀書案内] 博約書數種
 [遊學案内] 入學試驗問題(海軍兵學校)
 [雑誌] 諸君に警告、 法科大學 X R
 寓話 帝國大學 Y N
 [雜報] 學事數件
 [群芳] 寄稿若干
 [英文] ア、ク、セント、 文科大學 松 B 江
 Prof. Xes
 單語雜
 英語雜錄 神奈川縣中學教諭 櫻部 綺 一

普通讀書案内

每日の新聞紙上、新刊書籍、古書翻刻の廣告之の半を基く、汗牛充棟とて其に今

中學教育社編者、三版出來
 全壹冊、定價金參拾五錢
 郵税金六錢

日の有様を指すならむ、而して各書林、自己の賣高を多からしめんとして、ことさらに誇大の廣告を掲ぐ、地方の士爲に無用の書籍を購ふるもの多し、夫れ學問の要は書物の撰擇に在り、尙二層困難なるは如何なる順序によりて如何なる書を讀むべきかに在り、撰擇の不適當、次第の不順序は貴重之光陰を徒費し、精神を徒勞せしむ、本書は此等の弊害を救はん爲に出づ。先づ總論に「讀書法」を説き次に倫理●國語●漢文●英語●數學●博物●物理化學●教育●哲學等の項目に分ち、秩序的に有益の書籍を批評紹介し定價發行所等をも併記し、極めて懇切に叙述せり。學生諸君、一本を座右に備へ玉は、非格の利益あるべしと信す。

(帝國文學部) 初學者の書籍を撰擇する爲めには、選に便利なる指導を與ふるものありふべし。余輩は編輯者の親切を嘉す。

(日本新聞評) 各部門に分ち普通讀者に對して適好の書を掲げ其讀むべきものを案内したり、初學者の徒には少ながらざる便利を與ふべし。

◎初版数千部を賣り盡して今や再版成る陸懷御注文を乞ふ。

新撰文語粹金

中學教育社編著
 卷の上 定價貳拾錢
 卷の下 定價貳拾錢
 郵税 音册 四錢
 再版 版錢

本書は種々に分類し(一)國文調の長句を掲げて其下は引用書を示し、(二)また漢文調の長句を載せ、(三)國文調の短句、(四)漢文調の短句を列し更に詩歌をも加へて多角的ならしめたり。古人の成句中、雄健、麗麗、雅馴、精緻なるもの、悉く收めて本書にあり。百仞欄、光陰陸離、此書を座右にせば妙文立るに成らむ。坊間行はるるものと其稱を異にし、作文資料之凡ては尤も完全せるものなり。今や刻成る諸君の歡迎を望む。

「讀書新聞評」著名なる日作家、漢學家、小説家等の遺著中より麗麗なる熟語を拾集せしものにして、文章を作らんとする者の爲めに座右の好伴侶なり。

新撰遊學案内

中學教育社編著
 全書冊定價貳拾錢
 郵税 四錢
 出版 來

遊學上京者を指針せん爲に本書の必要なるは今更ら之を説くを要せず、坊間此種に關する一二の書籍ありと雖も唯雜然、學校規則を記載せるのみ。本書は先づ始に遊學者の心得を細大漏さず懇切に叙述し、次に秩序的に其進路を分項し、假令は文學者たらんと欲せば如何なる準備校を経て如何なる學校へ入るべきか、實

衆家たらんと欲するに如何して可なるか、軍人は如何の官吏は如何と各其目的を達し得べき方法を説明せり。校則は其要を摘み、學風特質を述べて嚴正なる批評を下し、以て遊學者に忠實なる勸告を與ふ。これ本書の他に優る所なり。

〔帝國文學評〕 東京に在る學校の一覽をいふべく東京遊學の志望ある地方青年の案内者たらむことを期せるもの。讀者はこれに由りて諸學校の性質を窺ふことを得む。

◎初版三千部再版二千部は僅二ヶ月にして品切となれり以て其好著なるをトすべし今や學年新たまり地方學生諸君續々發を買て東上し給ふべし本書は茲に訂正増補を加へて諸君の學海の好指針たらむことを期す。

◎近來類似の書多し中學教育社編著と特記して御註文を乞ふ。

NESFIELD'S

氏 英文法摘要

文學士大谷隴江先生譯著
全書冊定價拾錢
郵稅四錢
再版

〔帝國文學評〕 本書は英語文典中所說最新にして解説簡明の好評あるネスフィールド氏英文法書の第二卷を基礎となし、編者の意見を以て第三卷第四卷の一部を採り、

別に一冊子を編せるものなり。述ぶる所簡に過ぎず詳に失せず、尋常中學校生徒用として恰好なる英文法書なり。原書にイタククなる語には、印を附し、花文字にて始れる語には○印を附し、變り字には◎印を附して讀書の注意を惹かんとせる。印刷鮮明、殊に活字に誤謬なきは喜ぶ可し。小冊子として、は整頓せる中學程度的好英文法書なりと云ふ可し。

〔時事新報評〕 英文法書中簡易適切との好評を以て歡迎せられつゝある子スフ井一ノルド文法書を摘要して翻譯したるもの譯文亦平易にして煩雜に渉らざれば初學者の好伴侶たるを失はざるべし。

英語正音正字學

文學士大谷隴江先生著
全書冊定價拾錢、郵稅金四錢

本書は先づ英語の字母 Alphabet より説き起し、母音 Vowels から子音 Consonants の區別に及び、英語に存在する音 sound そのものを研究し、音と音を表現する字母を説明し、更に語 World の發音 Pronunciation を説き、進んで發音、綴字 Spelling、意義 Signification 三者の關係を述べ、終りに綴字の通則を列舉せり。尚ほ附録として、冠頭字 Prefixes 接尾字 Suffixes 複語 Compound words 及

既根HooBを掲げたり。邦文にて正音正字を論じたるものは本書を以て初めとす。
「時事新報評」一題に見えたる如く初學者の正確に英語を發音し誤謬なく英語を綴字するの法を説明したるものなり。

高等師範學校教授兼南摩綱紀先生監修
女子高等師範學校教授

小學提要

卷の一定價貳拾錢
卷の一定價貳拾五錢
三版出來

和裝美本

文部省檢定出願中

此編就「朱子小學」提其最切要於我邦今日之教育者以充
中學及師範學校倫理科課本

◎本書は出版後非常の好評を博し直に東京府師範學校、國邊協會中學、濱松中學、白井中學其他各地方の中學、師範の教科書たるの恩命を蒙るに至る尙陸懷御採用あらんことを。

佐賀縣師範學校教諭 野田五郎助君編著
在高等師範學校研究科 天野茂雄君補助

中等國文法教科書

全二冊
上巻 貳拾錢
下巻 貳拾錢
和裝美本
文部省檢定出願中

文部省の教授細目に據り、上巻には品詞論及び品詞各論を掲げ、下巻には單語の連綴法、文章論、古文の規則、單語の構成等を述べ、國語教授法の原理を昭らし、(一)文章の練習問題、(二)規則の大綱を含有し、(三)文法上の關係を明かにし、(四)實例及び練習問題、(五)中等教育に於ける讀本作文の兩教授法を結合して成果を得しめ、(六)文法組織の疎密、大學期教授の完全なるもの、(七)信す。中等學校、師範學校、山版せり。文法教科書として新案且つ完全なるもの、(八)信す。中等學校、師範學校、高等女學校等にて陸懷御採用あらんことを。

◎中學新誌は毎月發行後、大抵數日にして皆賣切れとなる。
故に購讀諸君は、豫めその最寄の書店へ御約束を乞ふ。
◎中學新誌は舊ひて發行期日をあやまらば、
◎中學書院發行の書籍は府下では東京堂、上田屋、北隆館、
田海信文、資會社、有斐閣、林平次郎、岡崎屋、中西屋、田

中屋、盛春堂、敬業社、誠之堂大阪は吉岡平助を始めとして
到る處の各書林にあり地方亦斯の如し、其最寄の店にて購讀
あらんことを望む。

○一切、前金を以て賣捌所に發送し、前金盡くれば發途を中
止す。

○故に發行後、相當の日時を經過して尙、地方の賣捌所に達
せざるときは、本院或は他の賣捌所へ御注文を乞ふ。

編輯所

東京麹町區高士見町
五丁目二十二番地

中學教育社

發行所

同、所

中學書院

書籍取次部開設

今般書院にて諸君の便利を計り、他店發行の書籍をも取次ぐ
べし。書名、著者、發行者を詳記し定價及び相當の郵税を添
へて申込られ、廉價、迅速を以て諸君に御満足と與ふべし。
右に關する件は中學書院書籍取次部に宛て、申越すべし。

中學書院書籍取次部

九元

71
449

